
～灼眼のシャナ～外伝<バベルの塔>

アテナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灼眼のシャナ／外伝＞バベルの塔く

【Nコード】

N8290C

【作者名】

アテナ

【あらすじ】

世界に跋扈し人間を食らい、世界を歪める“紅世の徒”。“徒”を討滅する為に“紅世の王”と契約し、異能の力を持った人間“フレイムヘイズ”。一人の男性と一人の“紅世の王”が織り成す運命の戦い。これは決して救いのない物語。

ゝプロローグゝ（前書き）

ライトノベルゝ灼眼のシャナゝの二次創作です。知らない人も読めるようにややくどくなっていますが……理解して頂けたら幸いです+

くプロローグく

“現実” 今、我々が生き、存在する世界。総称を人間と呼ぶ存在が支配する世界。生まれ、笑い、泣き、愛し、傷つき、そして死んでゆく世界。

しかし、彼らの大半は知らない。

本来ならば存在しないはずの人ならざる者達が、自身の安寧を脅かしている事を。

そして、人ならざる者にまた、自らが守られている事を。

くプロローグく

この“現実”の裏側。対面。

そこには、ある存在が有る。遙か昔、一人の詩人が彼らに名前を与えた。

“紅世ぐぜの徒ともがら”

それが彼らの名前。

そして、彼らがいる世界、自らは“渦巻く伽藍がらん”、詩人が呼んだ名は“紅世”。

“この世の歩いてゆけない隣”、そこでは現実の事象、概念は通じない。

まさに異世界。そんな世界に“徒”は跋扈し、互いを食らい合っていた。

存在そのものが入り乱れ、あるものは肥大化し、あるものは為す術もなく吞まれる。

食われぬ為に力を求め、力を得る為に“他の徒”を食らう。混沌とは呼べぬ純粋な世界。

やがて力を得た“徒”の中に、“王”と呼ばれる者が現れ始める。

奇々怪々、千差万別の容姿、特性を持つ“徒達”の中でも“王”は膨大な力を持って“紅世”に君臨していた。

その力の矛先を創造へと向けた一人の“紅世の王”の出現により、“紅世”は一変する。

その“王”が発明したものとは、“歩いてゆけない隣”、“現実”へと降臨する手段。

この手段は瞬く間に“紅世”の全域へと広がり、“紅世の王”、“紅世の徒”が挙って現実になだれこんできたのだ。

こちらに現れた彼らは、同胞の代わりに、人がこの現実中存在する為に必要な世界の力、“存在の力”を食らう事でこの世に顕現した。

この世の法則ではあり得ない、自らの存在を削り発動する不可思議の力“自在法”。自分の代用品として人間を使う事で彼らの、“紅世から解放された者達”はその不可思議な魔法を用いて抑制されていた欲望を叶え、空を駆け、地を碎き、人との繋がりを持ち、際限なく世界へと蔓延していった。

しかし、彼らの饗宴はすぐに悪夢へと変わる。

“存在の力”を食われた人間は“最初からいなかった者”として、周囲に認識される。

食われた人間を通して形成されていた周囲の世界は欠落し、見逃し難い歪みを生み出していく。だが、禁断の果実の味を知った、求めていた“徒”にはもはや制動は叶わない。

世界の歪みは数多の矛盾を呼び寄せ、その糧となり世界という器が崩壊していったのだ。

その影響は“紅世”にも及び、両世界は消滅の危険に陥ってしまった。

暴走する“徒”と“王”。

崩れていく両世界。

世界の危機と、再三の制止を無視した彼らに一部の“紅世の王達”は苦渋の決断を下す。

決断とはすなわち、強大な“王”の力を持って暴走する同胞を駆逐するという、仲間殺しの英断。

だが、それには一つの障害がある。

元来ならこの世に存在しえない“紅世”の者達は、この世界に顕現しているだけで自らの“存在の力”を消費してしまう。強大な王であればあるほど、そのリスクは大きかった。

そして、彼ら“紅世の王”は人間に目をつけた。

“徒”や発生した歪みに巻き込まれ食われ、肉親、伴侶、生き甲斐をなくし復讐に激昂する人間達。

悲しみと憎悪の紅蓮を燃やす非力な彼らに“紅世の王”らは歩み寄った。

人間と“紅世の王”、利害と心情の一致。

人間は望んで身体を明け渡し、復讐の笑みを浮かべて力を求めたのだ。

己の全存在を“紅世の王”の器として捧げ、強靱な肉体と異能の力を得た人間。

“紅世の王”の宿りし神器を御手に携え、彼らの同胞を滅する存在として生まれ変わった人間。

彼ら自らを称してこう呼ぶ。

討滅者“フレイムヘイズ”。

“徒”と“フレイムヘイズ”、両者の戦いは数百年にも及び、戦いの特異性に囚り、いまだ決着の兆しは見えない。

そして、現在でも世界の有り方は技術という概念を除いては何も変わってはいなかった。

彼ら人間の大半は知らない。

本来ならば存在しないはずの人ならざる者達“紅世の魔物”が、自身の安寧を脅かしている事を。

そして、人ならざる者“フレイムヘイズ”にまた、自らが守られている事を。

物語は、一人の“紅世の王”が“この世の歩いてはゆけない隣”へと突き抜けた時から始まる。

「プロローグ」(後書き)

分かりにくい部分があればすぐに直します+

第一話【貿易船ガルデア】（前書き）

えーと……前書きって悩みますね（苦笑）とにかく見て頂ければ嬉しいです＋感想や意見が欲しかったり↑ワガママ；

第一話【貿易船ガルデア】

エジプト北部、ナイル川デルタの北西に位置する都市アレクサンドリア。

古代マケドニア王・アレクサンドロス大王が、オリエントの各所に自身の名を冠名した都市を建築したが、その第一都市がこのアレクサンドリアである。

アレクサンドロス大王の死後、彼の部下であるプトレマイオス一世がエジプト全土を支配した際、その中心としてアレクサンドリアは使われた。

一時は人口が一〇〇万人を越え『世界の結び目』と敬されるまで発展をみせる。

その後オリエント文化と交わり、神学、古代文学、哲学の基盤となり、多くの偉人を生み出してきた。

しかし、交易条件の高い土地、宗教色が強いなどの特異性ゆえに欲望と争いの戦火に巻き込まれ、幾度もの衰退と繁栄を繰り返すこととなってしまった。

現在はエジプト・アラブ共和国の経済の中心地となり、カイロと並ぶ主要都市として確立している。

舞台はそれより約二〇〇年前、十九世紀のアレクサンドリア。

一八二二年

第一次エジプト・トルコ戦争により、一時的な政権を勝ち取ったムハンマド・アリーの近代化改革の一環として、アレクサンドリア周辺の土地で綿花が広く栽培されるようになった。

高度文明化する世界での綿花の重宝は大きく、その積み荷の貿易港としてアレクサンドリアは一挙、イタリア衰退の波を跳ね返し再三の栄華を取り戻し強大な貿易港として知れ渡る。

後に『地中海の花嫁』との敬称を冠するこの街の沖合三キロメートル。

先刻、アレクサンドリア港より出港した貿易船ガルデアは潮風の推進力を得、コバルトブルーの水面に波紋を描きながら夢と財の航海を続けている。

西欧技術の導入に伴い、近代化する船用革新の中でもカルデアは、未だに格式を重んじ従来通りの帆船様式を形しているものの、やはり信頼度は低い。

貿易船の名に恥じない大きな船体と広いキャビン。それとは対照的に、貨物室には交易に使われる綿花が所狭しと乱雑に押し込まれ、それを一人の青年が整理していた。

幾つもある支柱の一つにぶら下がるランプ。

その明かりに照らされた影が持ち主の動きを真似奇妙な踊りをみせる。

青年は深く息を吐き出すと背中をそらし、強張った筋肉をほぐした。アレクサンドリアの船乗り特有の浅黒い肌、擦り切れた淡いグレーのつなぎを着込んだその姿だけを見ればどこにでもいそうな若者だと誰もが思う。ただ違うのは、燃える様な黄褐色をした長髪と、髪の際間から覗く海：コバルトブルーの瞳。

船体を傾ける横殴りの波に室内の埃が舞い上がる。それから一瞬遅れて甲板から鼻をつく潮風が流れ込み、それらに小さく咳き込んだ。この様な悪環境において青年は、それでも作業を再開し、呟く。

「もう少し……もう少しで……」

「何がもう少しなんだ、シリウス」

青年の後方、埃を避ける為に顔をバンダナで覆った巨漢が耳聴くこの呟きに反応する。退屈かつ慢性的な作業をするしかない貨物室においては、気晴らしの会話が何よりも歓迎されるらしい。

それを知ってか、シリウスと呼ばれた青年は海の瞳を燦然と輝かせつつも作業をする手を止めることなく先輩に当たる男を肩越しに振り返る。

「ブロムさん、この航海が終わったら俺、結婚するんです。まとまったお金がもらえるから……」

シリウスは自分の言葉に照れた様にはにかみ、船底の壁から漏れる光に眼を細める。

彼の心は船体を作るベニヤ板を通り抜け、海を渡り、故郷アレクサンドリアの港街で自分の帰りを待つ少女に飛ぶ。酒場で働く気立てのいい、自分にはもったいないくらいよく出来た少女。

その少女と自分が結ばれる事を思えば、普段は苦痛にしか感じない貨物の整理も心なしか楽しかった。

その表情を見たブロムは、友人の門出を純粹に祝福し、また同時に惚気られた自分の軽口を後悔した。せいぜいのポーズとして、恰幅のいい巨体で小さく肩を竦めるという器用な真似をしてみせる。

「へっ、幸せの航海は順風満帆ってか。かーっ、羨ましいねえ」

明らかに拗ねた大人にシリウスは失笑し、機嫌をとりなそうと首を伸ばす。

「いやだな……そういう——」

——があああああ！！！！

ブロムさんこそ、

シリウスは続ける事が出来なかった。

金切り声にも誓い咆哮は、船体を震わせ、雷鳴の如く二人を怯ませた。

唐突な叫びに対して、波と風以外の音が一瞬静寂する。

シリウスとブロムは顔を見合わせ、弾かれた様に甲板へと繋がる階段を駆け上がった。

第一話【貿易船ガルデア】（後書き）

デルタは三角形の砂浜です。

わからない用語があったら遠慮なくどうぞ+

第二話【赤の世界　　白の人魚】（前書き）

中間考査に追われながらもちよつとずつ書いています（汗）余裕な
んてまるでないんですが（苦笑）

評価はともかく感想くらい欲しいので……お願いします（切実）

第二話【赤の世界 白の人魚】

日の光すら差ささない、完全なる闇の中。

ポツンと灯る、蠟燭の炎の様なそれは金色の輝きを放ち、揺らめく。

黄金の輝きに浮かび上がる、深紅の唇。やがてその花卉が開き、琴の声音が大気を震わせ、響いた。

「自在式・『來真の廻廊』発動——」

——同時刻地中海

麗らかな日差し（とシリウスは地下倉庫で思う）の中、突如として響いた咆哮。

それは雷鳴の如く轟き、船体を揺るがす。
聞く者全てに、絶対的な不安を抱かせる、福音。

カルデアのクルー達全ての経験を束ね合わせても、その豪咆に匹敵するだけの叫びを聞いた者は誰もいなかった。

ましてや、ここアレクサンドリア領海においては獣の叫びを聞くこと、そのものが稀有であり、そのことがより一層の危機感を煽る。

それゆえ、彼らクルーが堪え難い好奇の念と、怖れの究明に従い、甲板に集ったのも無理らしからぬ事であつたかもしれない。

当然、不可解極まりない咆哮は、船底付近にある貨物室にて整理をしていた二人にも例外なく届いている。

「ブロムさん………今の……」

シリウスが怯えれば、

「甲板に上がるぞ！」

ブロムが出口に走る。

二人は、潮風と年月に浸蝕され腐りかけた板が疎らにある地下階段を、苦もなく駆け上がり、彼らも感じた疑暗を解くべく甲板に顔を出す。

これで二人を含め、カルデアの操縦に最低限必要なクルー以外の全

員が甲板に集まった事になる。

だが、互いに押し合う様にひしめくクルー達は皆一様に言葉を嚙み、ひたすら身体を所在なさげに揺らすだけでシリウスが想像した喧騒はまるでなかった。

シリウスとブロムは怪訝そうな顔を作りつつ、ゆっくりと人垣を掻き分け、デッキへと身体を抜ける。

そして、シリウスの目に飛び込んで来たものは、透き通る蒼空でもたなびく白亜の雲でもない。

誇示するかの如く、唯一世界を彩る鮮やかな紅蓮。

世界が紅蓮一色に染まっていたのだ。

これは——なんだ——？

この、あまりに異常な状況においてシリウスは言葉をなくし、他のクルー同様に佇む以外の術を持てなかった。

蒼空、雲海、波紋、正午を過ぎたばかりの地中海が誇る嵩麗の青さ

はなく、ただあるのは……赤。

船体にぶつかる波は血潮。砕け飛び散る雫は血飛沫。

スカイブルーの海の色になるはずの空はなく、紅く輝く火炎が雲海の如く世界を多い尽くし光を投げ掛けてくる。

まるで、自分達が鍛冶場の炉に投げ込まれたかの様な錯覚すら覚える。

シリウスは、この不可解な現象を看破する寄り代を求め、自らの故郷を振り眺めようと緩慢な動きで首を回す。

だが、世界の有様は彼をより深い奈落へと陥れただけで、求めた答えはなかった。

本来ならば、まだ水平線上に浮かんでいるはずのアフリカ大陸の陰影は、頭上に広がる炎の幕が不知火の様に伸びて全てを包んでいる。

「せ……船長……。こりゃどういうこって？アレクサンドリアは？」

ブロムがおぼつかない足取りで上質の服を纏った男に近付く。

長年の経験から如何なる危機に見舞われようとも、彼は知識で生き抜いてきた。

言わば船乗りの自信とも言えるべきそれは、この孤立した世界では通じない。

その溺れそうな恐怖と焦りに、彼はただ縋るしか出来ないのだ。

老練の船乗りとして知られているブロムの動揺に、他のクルー達の間にはざわめきが広がり、やがては悲壮へと変わっていった。

「どこなんだよここは!!」

「アレクサンドリアがない……………なんで!?!」

「主よ…………お助け下さい…………」

「うるせえ!!　んなもん祈ってる暇があれば考えやがれ!!」

この場所に答えを求める者。

自身の立場に慌て震える者。

神への祈りを捧げ、縋る者。

その様子に苛立ち、動く者。

普段は血気盛んで、誇りを持っていた彼らの醜態に、シリウスはようやく事態の深刻さを悟る。

「船長!!」

だが、やはりシリウスも責任者へと匙を投げるしか出来ない。

船長は自我の忘失から目覚めると、長靴の踵を甲板に叩きつけた。

ドン、その音にクルー達が一斉に彼を見る。

「落ち着け！！ 焦ったところで何も出来やしない。今するべき事は情報を集める事……だ——」

彼らの遥か後方で

紅蓮の雲海に小さな隙間が

否、隙間ではなく、それは巨大な頭

近年、世界に広まり始めたマネキン人形のような陶器の肌にあるのは、唇だけ

——わああああ！！！！」

そして船長はそれを見た。
見て、悲鳴を上げた。

現れた顔はズルズルと紅蓮の間から全身を表す。
唇のみがある顔、蛇のように長く伸びた首、やはり巨大かつ長い腕。
胸板より下は奇妙な事に、魚の形をしている。

全身が白亜の人魚（ただし首と腕が異常な長さだが）は、遙かな天空から産まれ落つ赤子のように揺れながら紅い海に墜ちていく。

船長の悲鳴に振り向いた、何人かのクルーとシリウスはそれを見ている。

大海に頭から墜ちた巨大な人魚は、その質量に比例する水柱を噴かせ、沈んだ。

「お…おい！　今の…なに？」

「真っ白の…人魚？」

「ば……………化け物だ……！」

船長を始めとする何人かが口々に叫び、狂気に飲まれる。

その喧騒の最中、運良くそれを見なかったブロムが、ただ惚けるシリウスに詰め寄った。

「おい！　シリウス、何を見た？」

尋ねられた青年はゆっくりと首を回し、先輩のクルーを見つめ、唇を湿らせながら声を絞る。

「え……………全身が白い人魚を見ました……………。けど、首と腕が長くて……………顔も口しか見えなくて……………とんでもなく大きい……………」

「……………わかった」

ブロムはジッと聞いていたが、そこで黙らせた。これ以上聞いたところで意味がない。わかるのは化け物が現れたという事実のみ。

それだけが確かな情報だった。

「ブロムさん？」

「ああ、大丈夫だ」

思わず何かと尋ねそうになるのをシリウスは堪える。彼も言い聞かせているのと理解した。
自分の生死を。

だが、それもすぐに打ち碎かれる。

ドバァッ。

突如として水中から巨大な手が伸び上がり、水飛沫を飛ばし流れ甲板に手のひらを押しつける。同時に、耳に果実を潰したような水音が響く。

長すぎる白亜の腕を曲げて打たれた手は、甲板の右寄り、船長と何人かのクルーを一瞬で潰した。

その証しとして、シリウスの顔に何かの肉片がへばりつく。

一瞬の間をあげ、船首付近の甲板に左手が、海の女神を象った木像を割る程の衝撃を伴いつつ打ち降ろされた。

恐怖、焦燥、混乱、驚愕。

それらを混ぜた感覚に誰もが硬直し、動かない。
シリウスの頬を伝い、肉片が靴の甲に落ちる。

やがて船体を起点に、腕の先、おそらくは先程目撃した怪物がいる
であろう海中より現れる。

所々の木板が軋む船体に耐えきれず、弾けたように割れていく。
海中より浮かび上がる影は白くなり、その頭を見せた。

先刻に見たように、その顔には唇しかついておらず、隙間から見え
る歯は青い。

その口の端が吊り上がり、一瞬の笑みを浮かべた後、大きく開かれ、
数拍。

「があああああああ！！！！！！！」

怪物は、二度目の咆哮を上げた。

第二話【赤の世界 白の人魚】（後書き）

さあ、次はいよいよ物語の序盤に入ります！！

第三話【契約】（前書き）

修学旅行、期末考査とおおわらわです（苦笑）
少しずつ書きますね
+

第三話【契約】

燃えるような黄昏色の髪が汗で額にへばりつく。その隙間から覗くのはコバルトブルーの瞳。

つなぎの下に着込んだシャツは既に大量の汗を吸い不快感を煽る。だが、その事に意識を割く余裕はシリウスにはない。

紅蓮の世界。血の水面に浮かび獄炎の雲海に照らされている帆船ガルドア。

この不可思議な世界に漂流してなお、シリウスに悪夢が襲いかかる。頭上の炎、そこから墜ちてきた化け物。子宮から産まれるが如く空から赤の大海へ沈み、水柱と共に甲板へとのし上がってきた。

長腕長首白面白体の人魚。字の通り不自然な程長い手と首を持ち、白亜の巨体を持つ怪物。

極め付けは顔のない頭部。青い歯が並び、食道の代わりに果てしない闇が広がる口。

吸い込まれれば未来永劫の死を約束された地獄門。

そんな怪物が、ガルドアの甲板を軋ませ、船長を始めとする何人かのクルーを巨大な手で押し潰して、それを支点に白亜の上半身を持ち上げる。

その背後では同じ白亜の尾鰭が海面を漂い、時折小さな水飛沫を上

げている。

先刻同様、異形たるそれが上げた咆哮にシリウスは尻餅を付き、無様にも後退る。

眼前、見上げる首の先にある顔。

青白い歯が立ち並ぶだけのその顔はどこか人間臭く、それゆえに一層の生理的な恐怖を醸し出す。

シリウスは頬についた同僚の血肉をつなぎの袖で拭い、極力足元（おそらくはミンチ状の肉片がある）を見ずに、放心状態のブロムの腕を引く。

ビクッ、とブロムの腕が跳ね視線がぶつかった。

「あ……う……」

「ブロムさん……今は大丈夫ですから……」

意味を伴わない唸りを続ける先輩の口を塞ぎ、シリウスはちらりと化け物を確認する。涎とも粘液ともつかない何かが糸を引く口は時折閉開を繰り返すのみで、特に動きはない。

シリウスがブロムを引きながら甲板を移動した瞬間、それにつられた何人かのクルーにざわめきが走り方々に散らばる。

シリウスは自身の軽率さを後悔しつつ、流れに合わせて化け物から

遠ざかった。

その騒ぎに触発されたのか、当の怪物は首を蛇の様にしならせ、手近なクルーを捕食する。食いちぎられたかと思えたクルーは火の粉と化し、吸い込まれていった。

「え？」

「……消えて……」

呆気にとられるクルーに構わず怪物は首を自由に動かし、一人、また一人と火の粉に変え、飲み込んでいった。狂気に駆られたクルーは仲間を突き飛ばし我先へと甲板の端に集まるが、既に逃げ場はない。

左右は手に塞がれ、前は口、背後には得体のしれない海。

時は彼らに、神に祈る間も与えない。無情にも怪物は大口を開け、再三迫る。

——こんな所で……死ぬのか？彼女が待っているのに……嫌だ……死にたくない……っ……

青白い歯の奥に広がる常闇。今まさに、飲み込まれんとしたその瞬間。

シリウスの胸、いや、シリウス自身に声が響く。

《貴方に問う、生きたいか？》

「…………え？」

訳も判らず、状況には不似合いな、間の抜けた声を上げてしまった。狼狽するシリウスに構わず、もう一度。

《貴方に問う。生きたいか？》

女性、それも妙齡の女性の声が胸に。

自分は気が狂ってしまったのだろうか？この後に及んでも、それは異常過ぎた。

左右を見ても、誰もかれもが化け物を凝視しているだけである。

（俺に…………言っているのか？）

《貴方に問う！ 生きたいか！？》

思わず耳を塞ぎそうになるくらいに鮮明な叫びに、シリウスは怯んだ。怯んで、眼前の闇を覗く。

動悸がおかしい、息が弾む。何かに心臓を鷲掴みにされたように呼吸が苦しい。

（…………い…生きたい…）

胸中の声に願い、つなぎの胸元をキツく握り締める。額からの汗が

甲板に落ち、弾けた。

《貴方に問う。全てを対価に、自分を対価にすることをいとわないか？それでもなお、生きたいか？》

「生きたいッ！」

思わずがなり、叫ぶ。ブロムも離れた位置にいるクルーが驚きに悲鳴を上げ、シリウスをハッと見る。

怪物ですら不審がっているのか、口を一度閉じた。

《ならば呼びなさい、私を、私の名前を…。それが繋がり、契約になる。私が守って見せる。私の名前は――》

「“ラフィール”！」

ボツ、

叫ぶが速いか、シリウスの足元から火柱が立つ。熱を伴なわない火炎はブロムやクルーを弾き飛ばし、怪物に伸びる。火柱が怪物の額を捉えた刹那、良くなる首を限界まで逸らし、怪物は赤い海へと背中から落ち、大きな波を起こす。爆散することなくシリウスに纏わりつく炎は、藍。飴細工の様に透き通る、コバルトブルー。黄昏の髪を持つシリウスの瞳同様、鮮やかな青だった。

その燃え盛る火柱に捕われたシリウスは、炎による痛みとは別の苦しみを味わっていた。

自身の中身、そんな何かが急速に燃え尽くされ、がらんどろになった器に新たな、爆発的に強大な力が流れ込んでくる。

「……あ……あ……」

痛みはない、熱もない。

神聖かつ厳かに契約は進んでいくにも関わらず、シリウスはもがく。

“自分ではない何か”に身体が浸食されていく恐怖、不快感に耐え切れず、無様にも手足を駆使して火柱から抜けようとしていた。

シリウスには自分を消すだけの覚悟も決意も持ち合わせていない。生きたいという根源的な欲求のみの契約に伴なう対価をシリウスは拒否していた。

「おやめなさい、見苦しいわ」

シリウスの中に、凜冽そのものの声が響く。

彼女の声が聞こえた事で、シリウスはハッと我に帰る。

「これ…何？なんなんだよ！」

「見てわからないのかしら？私が貴方の“存在の力”を食し、代わりに私の“存在の力”を満たそうとしているの」

狂乱するシリウスに、彼女ラフィールはあくまでも沈静な対応を続

ける。

「存在の……力？」

「そう。この世界にある全てを構成する、最も強い力。今はその力を操る方法を貴方に教える……さあ、望みなさい……“神器”を。貴方を守る道具を」

ラフィール（というらしい）の言う事は何もわからない、わかろうとする気持ちすら湧かない。ただ一つ言える事は、希望の光が見えたらしい……それだけだった。

何もわからないなら、そのまま構わない、聞かれた問いのみを気にすればいい。

「……………剣……剣が欲しい……」

自らを守るには戦う他に道はない。だからシリウスは剣を望んだ。戦う力を得る為に。

「……それが貴方の望みなら。私は貴方の剣になるわ。さあ、戦いなさい……“フレイムヘイズ”」

「……フレイム……ヘイズ？……………うわ!？」

火柱から身体が甲板に投げ出される。シリウスは咄嗟に受け身を取り膝立ちになった。グレーのつなぎも、黄昏色の髪も、何一つ、焦げてすらいらない。身体に異常がないかを確かめながら立ち上がった次の瞬間、天を衝く火柱が細く、激しく収束し、シリウスの右手に飛んでいく。

思わず右手を前に突き出す形で迫り来る藍色の炎を受け止めれば、炎は長方形に広がり、ゆっくりとその姿を変えていった。

シリウスはそれを凝視し続け、やがて強く握りしめた。

炎が四方に飛び散り、消える。手に残った硬質の感触。

シリウスの右手に残った物、それは細身の鞘に納まった、質素な西洋剣。

鋼で出来た鞘の先端には金細工で出来た獅子が縁取られ、そこから伸びる直線が柄の宝玉へと繋がる。柄は細身の鞘に似合う、簡易な作りで、十字架のように両端が四角。柄の握りは意外にも両手剣らしく、拳三つ分程もあり惜しみなく赤い皮が巻かれている。

柄尻は丸く、中央に赤い水晶が埋め込まれていた。淡い光沢を放つそれをシリウスはまじまじと見つめると、左手を柄に沿えてスッと刃を抜き払う。

現れた刀身は、やはりと言うべきか鞘に見合う細さで、やや頼りない。だが、それらの要因を吹き飛ばすが如く、刀身にシリウスは魅入っている。

刃の色は、藍色。それも水晶のように透き通っており、刀身の向こう、僅かに甲板が見て取れた。

「戦いなさい、フレイムヘイズ」

「……………ラフィール？」

刃より声が聞こえる。

神器、ラフィールが具現化した姿。戦う為の剣。

シリウスが望んだ剣だ。

疑問符を浮かべる暇なく、海面が割れ白亜の人魚を表した化け物が再び甲板に現れる。

シリウスはラフィール（剣）の柄を握り締め、怪物を見据えた。

生きなければ、勝つしかない。
絶望的でも、だ。

第三話【契約】（後書き）

いよいよフレイムヘイズが誕生しましたが、契約の仕方は本誌を参考にしています（苦笑）

第四話【初陣・蒼き剣のフレームヘイズ前編】（前書き）

長いので前後編に分けて書きます（苦笑）

第四話【初陣・蒼き剣のフレイムヘイズ前編】

「生きるんだ……生きたい……」

ガルデアの甲板に、半身の体勢で前を見据えるのはシリウス。

アレクサンドリア周辺の船乗りの間ではよく見掛けるつなぎを身に纏い、青い瞳を輝かせ、燃える様な色彩の髪を持つ一人の青年。

元来なら凡庸で、ゆるやかに流れていくはずだった彼の世界は、僅か一時間たらずで大きく歪んでしまった。

それは後戻りを赦されぬ、果て無き修羅道への一步でもあるが、シリウスには知る由もない。

恋人との婚礼を迎える為に大きな航海に参加し、浮ついた心境を先輩にたしなめられ、苦笑を零したのも束の間。

鮮血の水面、燃え盛る雲海が広がる空。

大陸の陰影も見えず、何処かもわからない空間に、彼らの船ガルデアは孤立していた。

この不可思議かつ異常な事態に追い討ちを掛けるよう、現れた白面白体長首長腕の人魚を体する怪物。

その襲撃に逃げ惑い、追い詰められた瞬間、ラフィールと名乗る“紅世”から来た女性（といっても声だけだが）と契約を結び、訳も判らぬままに剣を握っている。

この異常と言う言葉すら霞む状況の答えを探す様に、シリウスは両

手に持つ剣と鞘に視線を落とす。

鮮やかな獅子の金細工が全体にほどこされた鋼の鞘。
にわかには両手持ちだとは信じられぬ細さの蒼晶剣。

その二つを合わせてラフィールだというのだから、シリウスの始末には終えない。

水晶の刃には、鮮やかな橙の髪の間から青い瞳を細める自身の顔が反射している。

緩慢な動きで顔を上げ、瞳に飛び込むのは、仲間を火の粉にし、喰らった怪物。

揺れる首から生える頭に顔はなく、薄く青い歯が立ち並ぶ口のみであり、その奥には喉などはなく闇が広がっている。

半ば自失していれば、蒼剣からラフィールが語る。

「悪食……まさか最初の討滅が貴方とはね……」
あくじき

おそらくは怪物に向けた言葉なのだろうが、シリウスにはラフィールが怪物の名前を知っている事に目を剥き、ハッと剣を見る。

だが、それを問い質す間もなく、シリウスは息を飲んだ。怪物が巨大な右腕を振り上げ、シリウスを握り潰さんと掴みかかってきたのだ。

「跳びなさい！」

「……………っ！」

ラフィールの声に気圧され、跳躍する。白い指が甲板を抉るのを見下ろしながら、ふとシリウスは自分が数メートルもの高さを跳んで

いる事に気付き、焦る。

「……………な!？」

「大丈夫よ、異常ではないわ。貴方はフレイムヘイズ…人間ではないのだから」

“ フレイムヘイズ ”

先程も聞いた言葉だが、それを素直に受け止める事など到底出来ずに、シリウスは何も判らぬ己への苛立ちから左手に持つ柄を強く握る。

挟まれた甲板とは別の位置に苦も無く着地すれば剣を胸元に引き寄せる。

「意味が判らない! 紅世って!？ あの怪物は!？ 貴女は誰で、フレイムヘイズって何なんだ!？」

コバルトブルーの瞳に怒気を滲ませ、彼らしからぬ激しい声で一氣にまくし立てれば、ばつが悪そうにシリウスは瞳を伏せる。

（何も叫ぶ事はないじゃないか……くそ…混乱してるんだ…）

そんなシリウスの心情を知ってか、蒼剣のラフィールは別段気を悪くした風でもなく、一つ一つ答えていく。

「紅世とはこの世界の隣りにある、私達が住む世界。貴方の言葉で言えば、異世界。あれは紅世からやってきた住人“徒”。私は紅世の王“魂沌の枷”ラフィール、フレイムヘイズとは紅世の王との契約により、王と一つになった存在。その意義は、世界に仇なす“徒”を討滅すること」

簡潔明瞭に語られても、シリウスは半分も理解出来なかった。わかった事は二つ。

自分が契約を介し、フレイムヘイズと呼ばれる人間（厳密には人間ではないがシリウスはそう考えた）になってしまった事。

フレイムヘイズとして、当初の予想の通り、悪食と呼ばれたあの怪物と戦わねばならないという事。

生きる…その決意と焦燥にかられ、シリウスは剣より言葉を仰ぐ。

「ラフィール……さん。あの……ともがら？えっと、悪食って…名前何なのかな？」

「ラフィールでいいわ。紅世の徒“膨喉の櫃”ガラジャ。悪食は、あざな」

不気味に手をしならせ、再度握り潰さんとする腕が迫るが、シリウスは超人的な反応速度と身体能力をもって（必死に、だが）これを躲した。

「悪食って？」

伸ばされた腕に飛び乗り、意外にも固いその皮膚を駆け上がりながら、シリウスは聞く。

「文字の通りよ。存在の力があれば見境無しに喰らう、下劣な“徒”」。何人もの“徒”を喰らいながらも、まだ満足していないようね」

はつきりとした侮蔑を含んだ返答に、シリウスは彼女が怒っているのだと理解する。王としての崇高さと大意を抱くラフィールにはガラジャは愚劣……よしんば認めるとしても憎んでいた。

「シリウス、彼を倒しなさい。今の貴方なら大丈夫、私が導くわ。言う通りに……」

確かに今のシリウスは人間を超越した存在。^{フレイムヘイズ}全ての感覚が研ぎ澄まされ、四肢は羽根の様に軽い。事実、シリウスの足は人間ならば世界一の駿足（フレイムヘイズとしては三流以下だが）になっていた。

シリウスはガラジャの腕を蹴り、立ち並ぶマストの支柱の天辺に着地し、下を見やる。

ガラジャをこうして高みから見下ろす事で、改めてその巨体さに呆れた声をラフィールは上げた。

実際、シリウスにしてもこれには同意するしかない。

下半身……魚の部分だけで既にガルデアよりも大きい。おびれを動かすことしかできないらしく、ほとんど動いていない。

手と首に関しては長すぎ、本来の機能性をかえってそこになっていた。これが、無秩序に喰らい、存在の力を増やし続けてきた結果だとす

れば、まさしく死者の呪いだっただ。

（本当の……悪食だ……）

シリウスは心中でそう吐き捨て、青眼で下方の怪物を見据える。

常軌を外れ、人を殺した怪物を目の当たりにしても、もはやシリウスは動じない。

それどころか、高い昂揚の中に居た。

血が沸き、力に溢れ、怪物と一戦を交えようとしている自分を、子どもの頃に夢見た、おとぎ話や、伝説に登場した英雄になったかのように錯覚し、不遜かつ傲慢な態度をもって対峙している。

ラフィールにしても、怯えや恐怖に震える者よりも、これくらいの気概があった方がいいと考えて、敢えて諫めなかった。

絶対的に殺し合いの経験は足りず、技術も才気もまだ開花していないならば、力任せに暴れるしかなく、ラフィールは慎重に言葉を選び、シリウスを促す。

「……この剣と鞘には名前があるわ。まずは覚えなさい……存在を知る事で、貴方の力になってくれるから」

シリウスは青眼に怪物を映したまま、力強く頷くと、中世のキリスト軍が祈る様にした様にシリウスもまた、左手の蒼剣を胸の前に掲げ、鞘を腰に当て、瞳を伏せる。

「剣の名前は、カラドボルグ。鞘の名前は、カラドボルゴ。それが貴方を守り、敵を討つ力」

カラドボルグ……とシリウスは口の中で呟く。

ラフィールの言った通り、存在を認識するだけで、蒼晶剣は手に吸い付くように、鞘は重みを増した。

「今の貴方は……討滅者フレイムヘイズ。いきなさい、貴方の戦へ」

「はい！」

シリウスはカラドボルグの柄を握り締め、足に力を込めた。

『後編へ』

第四話【初陣・蒼き剣のフレームヘイズ前編】（後書き）

閲覧ありがとうございました＋感想を頂いた方々も含めてお礼を申し上げます。

幕間・Tomorrow in the snowy (前書き)

えー、皆様。ホンツツすみません！打ち切った訳ではなくノート
とかに細々と書いている内に月日は流れて；

とにかくあと五話分くらいは既に出来ていますし、プロットも最終
話近くまで出来ていますので見放さないで下さい！……さて、
半ばフライング気味に投入することになったこの作品……実は小さ
なお友達に頼まれて書きました。駄作を書けば日本刀もどきで切ら
れるので一時間で書き下ろしの勢いで完成させました；外伝の外伝、
裏の裏：転じて表、本作の話です。どんだけフライングなんですか
ね？まあ、クリスマス前の話です十

幕間・Tomorrow in the snowy

ある晴れた日の午後、僕とシャナは二人並んで、いつかに来た公園のベンチに座っていた。

いつかと同じ理由、メロンパン巡りの長い食べ歩き。

けれど、僕は最初の数店で早くもその味に飽きてしまい、疲れていて……。

いつかと同じように、メロンパンを片手にした少女の妙に偉ぶった講釈を聞くところまで同じにしなくてもとは思っただけ。

色を秋に忘れてきた寂しい木々を揺らし、頬を撫でる北風に小さく身を竦めながらそんな恨みごとを言えば、

「うるさい！集中出来ないでしょ」

と、いつかと同じように叱られた。

適当な謝罪をしつつ、羽織った黒のコートのポケットに腕をつっこみ、暖を求めるけど、正直効果は薄い。

空の向こうまで広がっていた青空は徐々に灰色に侵されていて、それも含めて冬を感じさせられる。

「手袋、してくればよかったかな」

ベンチの硬質な感触を背中に感じつつ、そんなことをぼつりと呟けばジーンズの膝に可愛らしいデザインの手袋が置かれた。

「つけたままじゃ食べられない。預かってて」

聞いてもいないのに喋る仕種がなんとなくおかしくて、僕は小さく笑った。

もちろん睨まれたけど、そこはちゃんとお礼を言いながら誤魔化す。

「ありがとう、じゃあ預かってるよ」

そう言いつつ、まだ彼女の温もりが残っている手袋に手を通しそれを冷えきった頬に宛てた。

毛糸の冷たさに一瞬、鳥肌が立つ。その後すぐに、二人分の温もりが肌を暖めてくれた。

その様子に満足したのか、ジーンズに白のコートとという色違いのお揃いのシャツは少しだけ口の端を緩め、メロンパンを口に運んで、もっと至福そうな顔をする。

「ねえ、夏に回った店を一周したけど……意味あるのかな？」

僕はあてがわれた温もりに内心で感謝し、コートの襟に顎を埋めながら疑問に思っていた事を聞くけど、シャナは呆れた溜め息を返してこちらに向き直る。

その小柄な顔の中、磨き上げた黒曜石の瞳は講釈する楽しさに小さく輝いていて、僕のしまったという顔を寸分の違いなく反射している。

「あれから五か月も時間が経った、職人の鍛練を見極めて今後の展望の参考にする。それに、季節によって温度差から食感に微妙な差が生まれるからその確認」

「鍛練……？ 素直に腕が上がったって言えば——」

「話を逸らさないで」

地球最強（紅世にもいるかもしれないから）のメロンパン愛好者に質問した自分を後悔したけど、手持ちぶさたになっていた僕はそのまま続けた。

実を言えばこういった会話の節々にも色々としゃナの考え方がわかるから、楽しんでたりする。

ただ、それを直接伝えるのはさすがに気恥ずかしいので、僕は出来る限り普通を気取って頷く。

「わかった、前半についてはまだわかるよ。ようするに今後、更においしくなりそうな店をピックアップするってことだろ。後半は、季節によって違う味が楽しみたいってこと？」

はあてがわれた温もりに内心で感謝し、コートの襟に顎を埋めながら疑問に思っていた事を聞くけど、しゃなは呆れた溜め息を返してこちらに向き直る。

その小柄な顔の中、磨き上げた黒曜石の瞳は講釈する楽しさに小さく輝いていて、僕のしまったという顔を寸分の違いなく反射している。

「あれから五か月も時間が経った、職人の鍛練を見極めて今後の展望の参考にする。それに、季節によって温度差から食感に微妙な差が生まれるからその確認」

「鍛練……？素直に腕が上がったって言えば——」

「話を逸らさないで」

地球最強（紅世にもいるかもしれないから）のメロンパン愛好者に質問した自分を後悔したけど、手持ちぶさたになっていた僕はそのまま続けた。

実を言えばこういった会話の節々にも色々としャナの考え方がわかるから、楽しんでたりする。

ただ、それを直接伝えるのはさすがに気恥ずかしいので、僕は出来る限り普通を気取って頷く。

「わかった、前半についてはまだわかるよ。ようするに今後、更においしくなりそうな店をピックアップするってことだろ。後半は、季節によって違う味が楽しみたいってこと？」

一瞬だけ考えて答えれば、シャナはそれにも満たない間で首を振った。

「半分正解」

「半分？」

こくりと頷くシャナ。

「前半は正解。後半は真逆。確かに味が変わるのは魅力の一つ、だけどそれは店を変えれば良いだけの話。消費者が求める味を決まっ

た時に出せないのは二流以下。一流は常に求められる味を昇華する店」

「なるほど……つまり、食べたい味を食べたい時に出してくれないのはダメで、それをキープしつつもおいしくなる努力をする店が良いんだ？」

「そう」

醤油をかけたらソースでしたってことかな。

そんな例えは言える訳もなく、僕は他の疑問をぶつけた。

「でも、それには全ての店の特徴と味を覚えていなきゃできない。シヤナは覚えてるの？」

「当然でしょ、信じないなら説明する。まずは――」

ダメだ、この様子じゃ本当に記憶している。僕は慌ててそれを遮る。

「いや……遠慮しとく」

「だったら聞かないで」

ごめん：と、なんとなく尻すばみな声を出せば、断続的にパンが千切れる音が公園を支配した。

お情け程度に残っていた枯れ葉が枝から北風にさらわれ、明後日の方向へととんでいく。

いつしか空はどんよりとした雲がはびこっていた。

当然って言ったけど、普通は無理だろ？まあ、普通じゃないけどさ。

「帰る」

いつの間にか食べ終わっていたらしいシャナがベンチから立上がり公園の出口に足速に向かえば、慌てて僕も後を追った。

出口の車避けを跨ぎながら、ふと公園を振り返る。

キィキィ錆びた音をたてるブランコ。

ところどころ色の剥げた滑り台。

鋭い葉を茂らせる針葉樹。

恐らくまだ温かいはずのベンチ。

誰もいない清閑な園内には不可侵の寂しさが蔓延していて、少しだ

け僕も切なくなつた。

感慨に浸っている間に、小さくなっていたシャナの背中を小走りで追いかける。

「待ってくれたっていいじゃないか」

本当にマイペースだな。今に始まった事じゃないし、シャナだけじゃないけどね。

「どうかした？」

「ううん、別に」

「そう」

表情に出ていたらしく、怪訝そうな顔で見上げるシャナに首を振ると、信じたのかそれきりになった。

沈黙のまま、住宅街の建ち並ぶ帰路を歩く僕とシャナ。

誰も見掛けない、今は二人だけの空間。

まさか、君たちのマイペースさに呆れてましたとは言えない（言ったら死ぬ）ので、言い訳がましく手袋を外すと手渡す。

「はい、ありがとう」

「いい、悠二のが寒そうだから」

そう言われても、シャナだって鼻先が赤いじゃないか。我慢しないで、そう言おうとした時、懐かしい記憶が蘇った。

あれは、確か小学生の時、母さんに手袋を貸して僕が我慢するって言ったら……母さんなんて言ったっけ。確か――。

「じゃあ、半分こしようか」

「え？」

そうだ、こう言って――。

言葉の意味が分からなかったのか、足を止めたシャナの左手を掴まえる。

「ほら、こんなに冷たいじゃないか」

手袋を外したばかりの手で触れたシャナの手のひらは氷のように冷えきっていて、僕の中の罪悪感を広げる。

それと同時に、これからすること光景が浮かんで、僕はたまらずに少しだけ顔を綻ばせる。

「……………変な悠二」

言われなくてもわかってる。わかってるから。

微笑しながら彼女の左手に手袋をはめると、反対のを差し出す彼女の前で自分の右手に手袋をはめた。

「半分こってそういうこと？」

少しだけ笑ったシャナに肩を竦めると、素肌のままの左手で、同じく素肌のままの彼女の右手を強く握った。

幾千もの戦いを駆けてきた、女の子らしい小さく柔らかい手を、握った。

ぎよつとしたように肩を跳ねさせるシャナに、僕は極力、真面目な顔をして……

「これが一番合理的だろ」

「……うん。……変な悠二」

シヤナがおずおずといった感じで僕の手を握り返してくると、僕は再び歩き出した。

恥ずかしさに消えてしまいそうになる自分を必死に堪えながら、何とかシヤナを横目で確認すれば、微かに頬を朱色にしながら嬉しそうに笑う少女がそこにいた。

そんな顔を見ていたら、不思議と恥ずかしさは消えて、代わりに口許が緩くなる。

それを誤魔化すために空を仰げば、いつの間にか僅かに残っていた青空はなりを潜め、雪が詰まってそうな曇り空が広がっている。

きっと明日は、降るだろうな。

明日、また出かけようか。

メロンパンは遠慮したいけど、それ以外ならなんでもいい。

わざと手袋を忘れてみたりして、仕方なく手を繋いで。

怒るかな？

クリスマス前のほんの小さな休憩時間に、明日の為に雪が詰まった空を見上げながら、僕はそんなことを考えていた。

手袋を付けた右手よりも、繋いだ左手が不思議と温かかった帰り道の間に、どう明日の予定を切り出すか――

シャナ、君は雪が好きかい？

s i d e s t o r y F i n

幕間・Tomorrow in the snowy (後書き)

さて、読んで頂けましたでしょうか？ かってないほどの長さの前書きに辟易しないで下さい。指をささないで！！とにかく！打ち切りにはしませんので安心したい方だけ安心を。それ以外の方は舌打ちしながら待っていてくださいませ十なお、監修には小さなお友達になってくれたので合わせてお礼を（笑）ありがとうございます！

第五話【初陣・蒼き剣のフレームヘイズ後編】（前書き）

ノートに延々と綴られた文字をひたすら携帯に打ち込む作業……………
……タイピング？は得意じゃないのでしんどいです……………バトルシ
ーンは初めてですので（汗）

第五話【初陣・蒼き剣のフレイムヘイズ後編】

「——っ！」

溢れる激情を燃やし、身体の下から噴き上げる闘争心に身を委ねたシリウスは、マストを蹴り、一直線にガラジャへと滑空する。

ラフィールによる存在の力の制御を助けられ、飛ぶ様に迫るその敵に対し、ガラジャは一瞬の躊躇を見せるも右手を広げ握り潰そうと迎え撃った。

だが、人間には通じた攻撃を人ならざる力を持つシリウスに撃つのは愚劣であり、無謀ですらある。

事実、シリウスは橙の髪の間隙に覗くコバルトブルーの瞳で前方を見据え、憶することなく強く握ったカラドボルグを大きく横に薙ぎ払う。

紫電一閃。

フレイムヘイズの腕力と蒼晶剣自身の切れ味による斬撃は、大気を裂き、蒼い軌跡を描きながら確実にガラジャの五指を間合いに収め、シリウスの身体がその指に衝突した瞬間に、指は第一関節から四方に吹き飛ぶ。

ガラジャが耳を劈くような悲鳴を上げると、切り離された五指が鮮血の代わりに灰色の火の粉の壁になる。

その塊を突き破り、転がる様にしてシリウスは散り乱れる火の粉の中心で巨大な手首に身体を乗せた。

その半ば無理矢理な戦闘方法に、ラフィールに密かに悪態を吐く（彼女の尊厳の為に内容は伏せる）が、功を成したゆえに、取り立てては何も言わなかった（あくまでも口ではだが）。

「いきます！」

足に力を込め、

「ええ」

そのまま硬質な肌を蹴り、シリウスは髪を揺らしてガラジャの腕を駆け上がり、巨体を目指す。

足を肌に打ち付ける度にシリウスの闘争心、高慢な英雄気取りの無鉄砲さの炎はまるで、渴いた木に燃え移った火の粉の様に荒々しくはぜる。

左手のラフィール、もといカラドボルグの柄を強く握り締めながら、少年は大空を我がものに思う鷲のように力強かった。

「がああっ！」

「伏せて後退、衝撃に備え跳躍しなさい！」

ガラジャが反対の手でシリウスを潰そうと拳を繰り出すが、シリウスは身を屈めてそれを避け間髪入れずに後方に後退さる、同時にシ

リウスのいた位置に腕が振り落とされ腕全体に衝撃が走る。

シリウスは歪んだ前傾姿勢の体勢から、足下に伝わる衝撃をバネの様に利用して、一気にガラジャの左肩に跳び移り、コバルトブルーの瞳を天壤に渦巻く業火に煌めかせながら高々とカラドボルグを構える。

熱せられた空気が急速に膨張するように、蒼晶剣―ラフィール―の力が一時的に周囲の大気を満たし、逆巻く橙の気焰を噴き上げた。

蒼の剣を彩る力。

むろんシリウスが不慣れな存在の力を使ったのではなく、ラフィール自らが使ったのだが、シリウスは気にする余裕などなく、激情に瞳を染めあげた。

目前に迫るガラジャの左肩を見据え、

「っ……………だあっ！」

シリウスは、頭上に掲げた剣を目茶苦茶な体勢から、渾身の力を込めて振り降ろす。

フレイムヘイズと紅世の王の力を合わせたカラドボルグは、斬激の軌跡を残さずに、あやまたずガラジャの身体を構成する全ての物質を切り裂き、左腕を付け根から切断した。

直後、切断した腕が空中で灰色の炎の塊となりシリウスを怯ませる。

「がああああ!!」

「ぐ……………あっ…っ…」

ガラジャが体面もなく叫びを上げている間に、バランスを崩したシリウスは炎と共に甲板へと落下し、背中をしたたかに打ち付けてしまう。同時に右手に持っていた鞘Ⅱカラドボルゴが甲板を音を立てて滑り、剣からも光が消える。

散残する炎の中で、身体を突き抜ける衝撃に気管支が麻痺し、息が詰まるとシリウスは思わず苦悶の表情を浮かべ唾液を吐き出すが、強靱な肉体に損傷はない。

シリウスはそんな理不尽な身体を内心恨みながらも、とにかく身体をうつぶせにする。

「早く!!」

ラフィールはあくまでも最善の櫂を飛ばすが、シリウスの身体は怒りすら覚える程に緩慢で、それを仕方のないことだとは思いつつもやはり腹立たしく、何より焦っていた。

呻くシリウスにはわからないが、ガラジャは痛みに狂い、見境なく破壊を繰り返していた。

残った手でマストを砕き、僅かに生き残ったクルーを甲板ごと押し潰す。

喚きに喚き、その醜態は直視するだけで吐き気を催すものだった。

甲板の隅では、ブロムを含めた数人が辛うじて難を逃れているが、このままではガルデアそのものが瓦解し、紅に荒れる海に投げ出されてしまうだろう。

ならば、ガラジャを倒すまでにそう余裕はない。

そう看破したラフィールは、試す事にした。

ゆっくりと立上がり、健気にもカラドボルゴを拾い、カラドボルグを構えたシリウスにラフィールは命令する。

「剣を納めなさい」

「え?.....はい」

シリウスは武器をしまう事に不安を覚えるが、暴れるガラジャに注意を払いながらそれを納める。

「柄を両手で握り、正眼に構える」

言われた通り、鞘に納めたまま剣を構える。

「貴方の感じられる力を全て、カラドボルグに流しなさい」

「感じる力.....」

先程ラフィールが剣に纏わせた力を手繰り寄せる様に、シリウスは自分の中に流れる何かを探す。

そして、それはあった。

身体を循環する血液とは違い、常に満たされている力の感覚を辿り心臓や肺ではない、文字通り胸から発する何かをカラドボルグに流すイメージを取ると、淡い橙に近い色をしたオーラがカラドボルグに絡み付く。

直後、カラドボルグに装飾された銀細工の蔓が解け、鞘尻の獅子の頭が命を吹き込まれたかの如く口を開き、牙を打ち鳴らした。

威嚇するその先には、未だに気が触れたガラジャが小さな闘争心の下で猛威を奮っている。

「獅子を悪食に向けて、叫びなさい。貴方の力を込めて」

グッとシリウスが柄に力を込めると、身体からやはり橙の燐光が立ち昇り、カラドボルグに吸い込まれていく。それはシリウスの存在の力が吸い取られる行為だった。

自分の中の何かが急速に削がれていく薄気味悪さを感じていたが、シリウスはそのコバルトブルーの瞳でひたすらに敵を見据えたまま身動きすらしない。

そうして、燐光がおさまる頃には、尋常ではない疲労感と物憂さがシリウスを崩そうとするが、渾身の力を持ってして彼は剣を掲げ、叫ぶ。

「――フレスベルグ！」

なぜこの言葉を、自分が知っているのかはわからない（ラフィールと身体を共有しているため）。しかし口について出た言葉に、シリウスは確かな手応えを感じた。

自分は勝った、と。

シリウスの叫びに呼応するかのようにカラドボルゴが打ち震え、獅子が鹹を擡げる。

その口腔が大きく開き、灼熱する黄昏の光の塊が疼き、やがて、穿たれた。

放れた迸る力は太い光条となり、甲板を抉りながら、天使の投擲した聖槍の如くガラジャの胸から首にかけてを貫く。悽愴なまでに穿たれたその巨体は、一瞬のうちに膨れ上がり、激突のエネルギーに悲鳴を上げさせる間もなく爆発する。

長く尾を引く光条は、灼熱の光を撒き散らしながら紅の海を蒸発させ、ガラジャの下半身を飲み込みながら迸っていた。

そして、尾鰭を食らった光の軌道は上空に持ち上がり、弧を描く軌跡残しながらシリウスへと向かう。

光条が去り、割れた海が戻りながら衝撃に水柱を噴き上げるが、ガラジャの身体は、何一つとして残っていなかった。

「…………ぐっ」

迫る光にシリウスはこの戦いで始めて恐怖を覚えたが、限界まで力を無くした身体はフレスベルグを放った形のまま動かない。

目前に迫る光条に目を剥いた途端、唐突に世界が元に戻る。

「…………え？」

視線をアレクサンドリアの蒼空に向けた瞬間、光条は細い光となり、カラドボルゴの獅子に吸い込まれていく。

同時にシリウスの身体に不思議な満足感が広がる。
だが、それもすぐに目眩へと変わり、シリウスは甲板に仰向けに倒れ込んだ。

カラドボルゴにフレスベルグが残らず吸収された最中、シリウスは潮の匂いと、海鳥の鳴き声を聞く。

世界は戻ったのだ。

自分のよく知るアレクサンドリアに。

そう感じた途端、緊張の糸が切れ、シリウスの意識が遠ざかる。ちらりと横目にブロムを確認すると、生き残った何人かのクルーとこちらに近寄って来るのが見える。

だが、それもすぐに分からなくなった。

暗転する視界と感覚の中、ラフィールが小さな声で何か囁いたが、シリウスが聞き直す前に、彼の意識は闇に墜ちていく。

第一部 完

第五話【初陣・蒼き剣のフレイムヘイズ後編】（後書き）

どうでしょうか？やはりバトルシーンという内容なので不安が沢山あります…。

なお、完結ではなく、あくまでも第一部……出会い編とでもいいかもしれません（笑）、が終わりました。ここからは紅世、現実世界、紅世の徒、フレイムヘイズ、人間が複雑に絡まります（汗）

第六話【黄昏】（前書き）

最近は忙しいですね……なんて言っても意味がなかったり更新不定期ですみません（汗）

第六話【黄昏】

——紅世の徒“膨喉の櫃”ガラジャの襲撃から二日後の、アレクサンドリア市内。

時は午後五時の黄昏。

元来、黄昏とは故人が夕日に浮かぶ人影に『誰そ、彼は』と呼び掛けた事に由来すると言われ、光が暗くなるという字が宛てられたという。

事実、青い海は沈みゆく太陽の変色に伴い、鮮やかなオレンジへと色付いて、港町の風情をよく醸し出していた。

アレクサンドリア港では、一日の仕事を終えた船乗り達が、街では彼らを迎える女達が、それぞれに賑やかな一時を謳歌し、そのはるか上空、巣を目指す海鳥たちが茜色の空に点となり、独特の鳴き声を奏でながら群れをなして飛んで行く。

この地域では何一つとして変わらぬ日常であり、少なくとも水揚げ量や料理の出来に文句が飛び交ったとしても、それもまた日常のコマではあった。

しかし、この麗美な黄昏に包まれたアレクサンドリア市の北部、津波の際には皆が避難する高台に聳える、聖マリア病院に関しては、違った。

推進していく西欧化の波を受け、近代の建築様式を吸収し、三棟からなる真新しい病院の一角。

一人部屋のためか、小さいながらも衛生的かつ機能的な病室。床、カーテン、壁紙、部屋の全てを薄気味悪い程に白で統一し、ア

レクサンドリア海に面した窓の側にはベッドが置かれている。

ベッドには一人の少年が横たわっており、開け放たれた窓から差し込む日差しを、自殺防止のために窓に取り付けられた格子が縦縞に削ぎ、ベッドに落ちる影がそれを反映する。

先程海から戻ってきた海鳥たちが病院の上を横切り、ベッドに眠る少年の顔に影を過ぎらせた。

その時、橙の髪を額に流す少年の瞳がゆっくりと開く。
瞳の色は、青。

遠くで聞き慣れた海鳥の音がする。彼が一番最初に見たのは、天井だった。

窓から差し込む日没の光を受けて、黄昏に染まった明るい天井には、空調の為に巨大なファンが回っており、時折耳障りな駆動音がする。

ベッドに横たわったまま、緩慢たる動きで首を窓側に向ければ、やはり見慣れたアレクサンドリアの街が広がっている。

夕日を浴びた箇所は赤く、当たらぬ場所は黒い。

二色のトーンに分けられたアレクサンドリアは美しく、幻想的ですがある。

だが、そんな心に浮かぶ感慨すらも感じないのか、少年は身動き一つすらせず、時折思い出した様にまばたきをするだけである。

自分の常識や認識を凌駕する情報処理を課せられた脳は、思考が鈍くなると何かで聴き知ったが、まったくもってその通りで、つまるところ、名をシリウスという少年は自失していたのだ。

混雑し目眩く切り替わるシーンを断片的に切り分け、なんとか意識

の中から必要な情報を抜き出す。

アレクサンドリア港を貿易船ガルデアで出航し、積荷の整理をしていると異世界に引き込まれ、怪物に襲撃を受け、異世界の王の一人と契約し、勝った。

くどいくらいの言い回しだが、なんとか一文に表せなくもない。
内容に視点を置けば何ともファンタジックではあるが、身体に残る感覚が残酷な程強く事実だと告げていた。

ガルデアの貨物室。

燃える紅蓮の空。

赤に染まる海。

醜悪な巨人。

橙の焰柱。

蒼い剣。

光条。

記憶と感覚だけが酷く鮮明で、肝心の現実味が曖昧だった。
掴めるのに、何かわからない、そんな虚無の感覚。

実際に感じているのはベッドの寝心地（気持ち良い）、枕の柔らかさ（悪くない）など。

細かく言えば、磯の匂い、シーツの滑らかさ——左手に握る、何か硬質な感触も入れてもいい。

シリウスの額に脂汗が滲む。

全ての出来事が現実だったかどうかの答えが、左手に——カラドボルグ——ある。

そう思うだけで、言い様のない不快感が込み上げてくるようだ。ガルデアの破壊、クルーたちの末路。

子どもじみた高揚が引き下がってみれば、“死”そのものの絶対的な恐怖が背中に広がる。

自分は助かり、他のクルーは死んだ。

生か死か、運命という不可視の歯車が僅かに狂っていれば、自分も骸すら残さずに火の粉となって喰われていたかもしれない。

それを安易に受容できる程、シリウスの精神は強くはなかった。

むしろ、ガルデアから運悪く転落し、病院に収容されて悪夢を見ていたと理屈付ける方が遥かに楽ではないか。

(でも、ごまかせないのも事実だから)

竦む気概を鼓舞し、シリウスは左手を持ち上げる。

シートが捲れ、現れたのは、鋼の鞘。

シリウスは右手を支えに、上半身を起こすと、それを日没に掲げた。

黄昏のに染まる銀細工の獅子がシリウス同様に輝き、壁や天井に光沢を反射する。

右手を鞘——カラドボルグ——に添えて柄から抜き払うと、透き通るような蒼晶剣が姿を見せて、シリウスの顔を映した。

「おはよう、寝坊助さん？」

「すみません、ラフィール」

鼓膜を打つ声が刀身から響けば、シリウスは自然と応対していた。彼女こそがシリウスと契約し、フレイムヘイズへと変化させた、紅世の王“吸魂の枷”ラフィールである。

「現実、なんですね」

一応は疑問を投げかける文体ではあったが、シリウスは当に理解していて、ラフィールもそれを繰り返す必要はないと感じたのか、返事を重要な部分に収縮させる。

「貴方と私は、討滅者“フレイムヘイズ”」

「……………はい」

シリウスがクルーの死や自分の変容に衝撃を受けていると確信した上で、ラフィールは事実を肯定する。

やはり、彼女はどこまでも厳しかった。

——コンコン。

「——ッ!？」

シリウスが二の句を継がないでいると、その沈黙を破るように病室の戸が叩かれた。

思わず身体を跳ねさせるシリウスに、対してラフィールを口を嚙んだ。

とにかくカラドボルグを誰かに見られる（病室に運ばれた時に見られていたという判断はない）訳にはいかず、シリウスはカラドボルグをカラドボルグに戻し、シーツの下に（ラフィールは大変不満だが）隠した。

そうして弾む心拍を落着け、扉に向かって平静を装った声をかける。

「はい、どうぞ」

返事の後、気配はあるにも関わらず妙な沈黙が流れる。

ひよっとしたら、自分がまだ意識を取り戻して考えていたのかもと
思い、シリウスは再度同じ言葉を投げかけた。

それでようやく決心したのか、ためらいがちに扉が外側に開かれ、
紺色のスーツを来た女性が会釈をしながら病室に入ってきた。

アレクサンドリアの熱い気候にも関わらず、きっちりと着込まれた
スーツは線の細さを象徴するように身体に密着し、この地域では珍
しくない黒い髪と瞳を持つ女性。

怖そうな人だ。

シリウスは不躰にも、入ってきた女性に感想を漏らす。
後ろで束ねられた髪や切れ目、よどみのない動きには率直な女性らしいというイメージが沸き上がるが、入室を躊躇したことを考えると慎重もあるかもしれないが、今は伺えない。

「こんばんは。起きていらっしやっただね、大丈夫ですか？」

「はい…大丈夫です。…あの、病院の方ですか？」

イメージ通りの無感情な声に一瞬たじろぐも、遠慮がちに尋ね返したシリウスは、返ってきた答えに思わずシーツの中でカラドボルグの柄を握り締める。

「私はジーン・マークス。警察です」

ラフィールは、まだ口を噤んでいた。

第六話【黄昏】（後書き）

後書きで説明なんて言語道断なんですが……つまり乗組員が消えて
いるからシリウスは殺人罪ではなく器物破損罪だけしか容疑がかか
っていない訳です！

第七話【ロスト・パーソン】（前書き）

書く事ないです（笑）

第七話【ロスト・パーソン】

「警察……ですか？」

予想が出来ない訳ではなかった。

正体不明の怪物の襲来、大型船の半壊。果ては死傷者も出ている。これらは到底、無視できる内容ではないからだ。

しかし、シリウスつい今し方意識が回復したばかりで、思考が追いつかないのも無理らしからぬことと言えるかもしれない。

いずれにしても、シリウスは警察という機関の出現にただただ混乱していた。

そんな少年の心中を察してか、マークス捜査官は人当たりのいい笑みを浮かべ、ベッドの傍らに置いてあった丸椅子を引き寄せ腰掛ける。

そうして、スーツの懷から手帳を取り出すとペンを片手に膝の上で開いた。

「ええ。私はある事件の捜査をしていて、それについて少しお話を伺いに来ました」

そこまで言って、ふっと肩を竦める。

「まあ、今日は様子を確認させていただくつもりだったんですが」

シリウスはようやくガラジャの襲来と警察の来た理由を結び付ける。やや慌てながら居住まいを正し、シートの中で神器カラドボルグを強く握る。ラフィールは口を挟まず、会話を傍受していた。

シリウスは改めて目の前の女性を仰ぎ見る。
警察……信用できる？

「あの……すみません、俺状況が……」

とりあえずシリウスは、混乱に混乱を重ねられた自分には状況を説明出来ず、なぜ自分が病院にいるのかも判らないと告げる。

その旨を聞いたマークス捜査官は少し考える素振りを見せて、やがて得心が言ったように頷く。

「わかりました、ではそれも含めてお話します」

そう言ってマークス捜査官は手帳のページを指で繰る。

「まず、一〇月八日午前十一時アレクサンドリア港第三船舶場からフランスのポールへ綿花の貿易船ガルデアが出航しましたが、その二時間後、寄港しました」

「……壊れたからですか？」

マークス捜査官は頷く。

「はい、ガルデアは半壊。竜骨は軋み、もはや廃船扱いにするしかなかったそうです。もっとも、今は私たちが差押えています」

ズキリと、シリウスの胸が痛んだ。船乗りとしての経験が浅くとも、ガルデアはシリウスの大切な場所だったから。

「帰港したガルデアにはすぐさま水産自治会の救助隊が向かい乗組員であったブロム・カーティス、モーガン・シェバイエ、ジョーン・

バーテがショック状態で発見されました。彼らもこの病院に収容されています」

三人……。それだけしか生き残っていない事実 zu 苦悩する半面、シリウスは妙な引つ掛かりを感じた。

「待って下さい、俺は？」

「今のは乗組員に関する情報です。あなたは乗組員ではないでしょう？」

……嫌な予感が胸をかすめる。

「い……え……俺もクルーです……」

声が震える。

「ですが、記録にはありません。はっきりと言いますが、あなたに関する資料を我々は持ち合わせていません」

マークス捜査官は手帳から顔を上げれば目付きを強めて、シリウスを見つめる

「あなたは、誰ですか？」

一瞬世界が歪んだ。脳天を叩かれたように、感覚が希薄になる。名前が、ない？馬鹿な！

「俺もクルーです！」

ベッドから身を乗り出し、食ってかかるような剣幕のシリウスに対して、マーカス捜査官はなぜか侮蔑の表情を浮かべる。

「記録にはありません、三人の乗組員に聞いてもあなたはなぜか乗っていたと言っています。失礼ですが、お名前を」

「……シリウス・ベックマン」

マーカス捜査官は口許を歪め、その名前を手帳に書き記す。悪意を隠そうともしていない。

「燃える（シリウス）、ですか？ エジプト語ですよ、地元の方ですか？」

マーカス捜査官の瞳がシリウスの青い瞳や黄褐色の髪を無遠慮に捉える。

それは昔から浴びてきた、奇異の視線だった。

「一応、生まれも育ちもアレクサンドリアです、父が英国人、母がエジプト人ですけど」

適当に頷きながら、マーカス捜査官は手帳にそれらを書き込む。

当時のアレクサンドリアは西欧からの独立革命があった直後で、外来人に対しての風当たりが強かった。

だから奇異の視線にはなれていたのだが、この女性の視線には不快感が掻き立てられる。

「話を戻しましょうか？ シリウスさんはガルデアの記録には残っていません。これは事実です。ブルム氏に確認しても、シリウスさ

んとは過去一度も面識がない——」

「そんなはずはないっ！ ブロムさんとは二年以上……」

再び身を乗り出すシリウス。

混乱が正確な思考を妨げる。自分の存在が忘れられるなんて…そんなことが……。

存在…の…力。

シリウスはハツとしてシーツの下のラフィールを思う。

彼女に聞くしかないのか？

フレイムヘイズと何か関係が？

シリウスはやる気持ちを押さえて、俯きながら声を絞り出す。

「すみません、今日は……」

マーカス捜査官はそれを聞くと、気を悪くした風でもなく、手帳をしまいながら立上がり椅子を片付けて、シリウスにまた人当たりの良い笑みを浮かべる。

「わかりますよ、病み上がりですから。こちらでもやる事が出来ましたから、三日後の同じ時間に来ます」

つまり、彼女は自分に待っていると言っていた。

ようやくシリウスは不快感の正体に気付く。

マーカス捜査官のシリウスに対する敵愾心、詮議まがいの口調の意図…彼女はシリウスがガルデアを襲撃したと確信していた。

ふと気がつけば、マーカス捜査官は当に姿を消していて、辺りには

夜の帳が降りていた。清閑とした世界。

シリウスは、鉄格子のはめられた窓から、悲しい光を放つ月を見上げる。

一片の温もりもない、凍りついた半月。

「覚悟を、しなさい」

口を噤んで以来ラフィールが初めて唇を開いたが、シリウス物憂げな顔のまま身動き一つしなかった。

そうしていつしか朝日が昇っても、シリウスは一抹の睡魔も感じることが出来ずに一夜を明かす。

その後、言葉の通りにやってきたマークス捜査官の報告により、シリウスは絶望に愕然とすることになる。

予想の通りシリウスには“ガルデア損壊”の罪がかかっていること。

そして、シリウス・ベックマンという人間はアレクサンドリア貿易商会はおろか、市役所の戸籍、エジプトデータバンクにすら登録されておらず、その痕跡もない。

シリウスは、自分の存在の証をすべて奪われていた。それだけではない、喰われたクルー全員も同様だった。まるで最初から、何もなかったように。

第七話【ロスト・パーソン】（後書き）

間違えて前回の後書きに、今回の後書き書いてました（苦笑）
ネタバレしてましたよ……

第八話【サハラの恋人】（前書き）

す み ま せ ん ！

盲腸と憩室炎で二週間あまり入院していたのと、中間に追われていました……このような拙い物でも読んで下さっている方々、申し訳ありません……

第八話【サハラの恋人】

五〇〇年前

十四世紀初頭、この頃の世界では世界各地で文明的、または改革的な変化に溢れていた。

極東の島国では足利高氏（後の尊氏）の名を持つ武将が反旗を翻し、ヨーロッパがルネサンスの芸術進歩と百年戦争の動乱の渦中にあり、英国では艦隊が形成されている最中にあっても、世界のどこかではフレイムヘイズと紅世の徒との熾烈な戦いが繰り広げられていた。

組織的なくつかの“徒”の軍勢に気圧されつつも、フレイムヘイズ達は各自に世界を飛び回り、世界の安寧を確保すべく命を賭している。

元より数で勝る“徒”に対して、フレイムヘイズには修業の必要があり、幾年幾月の琢磨を経て屈強な戦士となる。

その為に必然的にフレイムヘイズも徒党を組む必要があり、複数の大組織の形成へと繋がっていくのが必然であった。

だがこの時、組織同士の戦へと昇華していく両者を余所に、二人の“徒”がこの世界へと紅世からやってきた。

時刻は夜、アフリカ大陸中央部に広がるサハラ砂漠。その広大な面積を誇る砂丘の山の影に点在するオアシスに、それは降り立った。蛇の身体に蝙蝠の翼を持ち、双頭の鷲の頭を持つ異形の“徒”。南米に生息するアナコンダと呼ばれる大蛇に似た、血の様な血の様な鱗に覆われた身体は十数メートルにもなり、さらに二股の首が伸びるとその先には、金色に輝き知的な瞳を持つ鷲の双頭があり、分かれた首の付け根には薄い皮膜が張られた翼が生えていた。

それを器用に折り畳み、首を擡げ草花を眺める様はどこか物々しく、神聖さを醸し出している。

それは古来よりエジプトに伝わってきた、死を司るオシリスの顕現を見立てているようにも感じられ、威圧を振り撒いていた。

周囲の砂肌とはかけ離れ、狂ったように咲き乱れる花に囲まれ、泉の回りから天空を衝くように伸びるヤシの木。

幻想かつ流麗な景觀の中に鎮座する燃える宝石のような双頭の蛇の姿は、泉面の光に瞬き、これ以上の美しさを望めない程に、圧巻だった。

彼が見上げる先、一片の雲もなく、数多の星々に囲まれ冷たい光を燦然と放つ月に一つの影が差し、やがてそれはローブを纏った人の形を為して大蛇の前に着地する。

新たな“徒”の足許草花が踏み倒され、大蛇がそれを咎めるように眺めつつ、右の鷲が口を開いた。

「遅かったな、ずいぶんと手間取ったようだが」

その咎めるまなざしに気付いたのか場所を退けば折れた花にローブに包まれた右手を翳す。すると花が自力で立上がり、まるで何もな

かったように力強く屹立する。

「はい。思ったよりも時空の波が激しくて…」

フードから唯一現れている赤い唇から女性の声で謝罪が零れ、言い淀んだ。

大蛇は苦笑するように首を揺らして、再び夜空を見上げる。鷲の瞳が居抜く様に月を捕らえた。そして左の鷲が嘴を鳴らす。

「仕方あるまい。最近ますます制定者と同胞の戦いが熱を博している。世界そのものが歪んでおるのだ」

「そうね……由々しき事態だわ。でも、だからこそ、あなたが来たんでしょう？」

「その通り、我がこの戦いを止め…世界に安寧をもたらす契機となる」

フードの中の顔が頷く。

「はい。この身、ニーズヘグ様の御身と大願の為に」

「ふはは……よいよい。まるで“弔いの鐘”墮天使のような言い様ではないか」

ニーズヘグがさも愉快そうに笑うと、皮膜の張った翼を大きく広げ、女性を包み混むと顔を寄せてフードの中を覗き込む。抱かれた女性も、心なしか嬉しそうに竜の抱擁を受けている。そうして、ニーズヘグが嘴を鳴らし、愛の教示を打ちしたためれば、ローブから木の枝を張り合わせた様な両手が伸び、ニーズヘグを抱き締め返す。

「死なせはせぬよ、お前だけはな」

この出来事が五〇〇年前。

第八話【サハラの恋人】（後書き）

また頑張りますので、よろしくお願い致します

第九話【世界からの喪失】（前書き）

中間終わりましたー、大学が近付きましたー、更新しましたー……
前書きってなんですかね（笑）

第九話【世界からの喪失】

フレイムヘイズ。

人ならざる者、異能の力を持つ者。紅世の徒を討ち払い、世界の流れを守り、永遠を生きる者。

その言葉を自らが握る剣カラドボルグーラフィールが話すのを、シリウスは院内の中庭に設置されたベンチに腰掛けて聞いていた。

ここはアレクサンドリア病院。名前の示す通り、アレクサンドリアに唯一ある大型の病院である。

アレクサンドリアは、津波対策として、ちょうど中央にある高台の上にある。

そこにシリウスが担ぎ込まれ、五日目。

マークス捜査官からは貿易船損壊の容疑者に認定された二日目。

今は、シリウス自らが選んだ宿命、フレイムヘイズとなることの本質をラフィールはそれを、彼に語り聞かせていた。

「フレイムヘイズは、いつの時代にも、それこそ太古から存在している者もいる。フレイムヘイズとは討滅者。戦いの業を生きる者」

周囲には、シリウスと同じ様にベンチに腰掛け、麗らかな日差しを浴びる老人たちがいる。芝生や木陰に座り込み、入院の事実を忘れて、笑いあっていた。

「紅世とは、この世界の外に存在する異世界。数多の“徒”が蔓延り、彼らの特性に応じた生き様を描いている」

時折、遠慮を知らぬ子ども患者がシリウスの前を駆け抜け、看護師を困らせていた。

「紅世の徒は、この世界の存在を知ると、こぞってこの世界に顕現し、自由と破滅を謳歌したわ」

だが、そんな平和な喧騒も、和やかなざわめきも、シリウスの耳には届かない。

今のシリウスには、カラドボルグが放つ説明を咀嚼し、理解する以外にすることがなく、それしか出来なかった。

「しかし、“徒”がこの世界に在り続けるには力が必要だった。元来、この世界に存在していなかった“徒”は、ただ在るだけで力を消耗してしまう」

そして、“徒”は人間に目を付けた。世界に存在する人間の力を喰らい、この世界にとどまり続けようとした。

シリウスは意識せずに、覇気のない視線を、蒼晶剣カラドボルグに落とした。

この剣は、意識せねば、自分以外の誰にも見えず触れられないらしかった。

少なくとも、人間には。

それゆえに、シリウスが古風な片手剣を握ってしようと、周囲の人間には認知出来なかった。

「いつしか“徒”は、人間を糧としか見なくなり、欲を満たすモノ

と認識するようになる」

しかし、どんなものには因果は巡る。何かを食らえばなくなるのは必然。

そして、食われた人間はこの世界から抹消される。

全ての人間の記憶中から、消える。全ての記録を失う。

最初からいなかった、否、そんなものが存在する流れすらも断たれてしまう。

事実、シリウスには戸籍から始まり、手紙、写真、友人の持つ記憶の中すら在ることを許されなかった。

「そして、世界からの欠落は破滅へと繋がり、自由に行き来出来た紅世と現世の狭間に時空の嵐が現れた」

最初はそれほど脅威ではないと思われた捕食。

例えば、ある兄弟がいるとする。その内、弟が食われた場合。

両親はもともと一人しか息子はいないと認識し、気にしない。

兄も、自分しか子どもはいないとしか認識出来ず、そのまま永劫に忘れてしまう。

たとえば、両親がどれだけ弟を愛していようと、兄がどれだけ信頼していようと。

だが、世界にはあってはならない矛盾が数多く存在する。

夫がいなかったことになる妊婦。

両親がいなかったことになる赤子。

治める王がいなかったことになる国。

矛盾が新たなるが新たなる矛盾を呼び、連鎖反応のように再び矛盾が現れ、やがて世界の許容範囲を超えてしまった。
もはや繋がりがあっていいる紅世と現世。

その双界の狭間には“徒”が引き起こした混沌の流れが濁流のごとく、流れ双界を歪め、穿ち、碎き続けている。

この流れが満ちた時、双界は崩壊する。崩壊した時、何があるかはわからないが、良くはならないだろう。

そこで紅世に住む王たちは、仲間殺しの決断をする。
現世に跋扈する“徒”の絶対数を減らし、世界を安定させようとしたのだ。

しかし、それには一つの問題があった。すなわち王達の顕現。名だたる王たちは顕現するには。膨大な存在の力を必要とし、地上にはあまり滞在できなかった。

“徒”を倒す為には王の力が必要で、王の力には存在の力が必要。しかし、王が人を食らっては本末転倒。意味がない。
それならまだ力の弱い“徒”のがマシというものだ。

「そこで、目を付けられたのが、人間」

“徒”に家族や仲間、恋人を喰われた人間。

この世の裏側に潜む、醜悪な存在に関わってしまった人間。

王たちは言った、身体を明け渡せば、敵討ちの力を授ける。

彼らは喜んで身体を明け渡した。元より生き甲斐を無くした身、戦いに新たなる生き様を委ねられるなら、それは願ってもいない事だったからだ。また例外も多々あった。

復讐を原動力に、正義や安定を真髄に、紅世の王との契約をした戦闘兵器。

それらを総称し“討滅者 フレイムヘイズ”と呼ぶ。

「俺と、ラフィールも…」

「そう。二者一体のフレイムヘイズ」

そこまで説明を受けたシリウスは自嘲気味に笑った。

目の前を歩いていた老婆が訝しげに見たが、どうでもいい。

その背中が離れていくのを眺めながら、シリウスは鞆・カラドボルゴに納まっているラフィールを見つめる。

「ようするに、フレイムヘイズっていうのは全てを無くさなきゃだめなんですよね？」

ラフィールは肯定する。

身体を明け渡すということは、自分の持つ全存在を与えること。シリウスの存在するための力は全て、写真絵画、書物手紙、記憶事実、を介して世界から消滅。文字通り世界から全てが消えた。

「あなたに伝えないといけないことがある」

「何ですか？」

不意に泣きそうなくらい悲しくなったシリウスは、ぶっきらぼうに尋ねる。

そんなシリウスに構わず、ラフィールは有りのままを伝える。ラフィールは、シリウスに厳しいかった。

「強力な紅世の王と徒が来るわ。時間にして、数秒」

「……………は？」

刹那、世界が茜色のドームに覆われた。

天に、壁に、地に、複雑極まりなく絡まりあった文字とも記号とも付かない、文字の羅列があちこちから伸び、ドームを彩っている。

その光の羅列は“自在式”。

魔術に於ける呪文であり、力学における数式、神話における神官文字。

記号というものは意味を持ち、組合わさることで意味を、さながら絵画のように理解するものに描き観せる。

“自在式”、存在の力を操り摩訶不思議な現象を起こす“自在法”、その力の流れを示す構築式。

「こ、これは？」

シリウスが激しく取り乱す。それは形、雰囲気こそ違えど貿易船ガルドアとアレクサンドリアを包んだ空間に酷似していたからだ。唯一違うのは、人々が固まったこと。

まるで人形のように、そのままの体勢でピクリとも動かない。

“膨喉の櫃”ガラジャ。

仲間喰らいの巨大な人魚。

それを思い出し、シリウスのコバルトブルーの瞳が揺れる。

カラドボルグをカラドボルゴから抜くのを躊躇い、結局何もしない。

「ンダァ？ コノガキハ封絶スラ知ラネエノカヨ」

「そうみたいですわね。しかしそれも無理なきこと。何故なら彼はフレイムヘイズとなって間が無いので」

頭上から声が響き、シリウスが上を向くのと同時に中庭に二つの影が着地する。

その際生じた衝撃で突風が巻き起こり、シリウスを風の奔流が煽る。

「ぐっ…」

比較的離れた位置にいた為に、シリウスはベンチを掴み耐えたが、他はそうはいかなかった。

着地点にいた子どもや看護師はひしゃげ、潰れた。

あるものは吹き飛ばされ、木や壁に激突し、吹き飛んだ。

シリウスは先程自分を見た老婆が、高く舞い上がり壁に激突し、硝子細工のように粉々に粉碎したのを見て、胃液が込み上げる。

「ケッ、弱イナ。オマエ」

ようやく突風が収まり、視界が晴れ渡れば、惨たらしい眺めとなった中庭に屹立する二つの存在。

一つは、果てしない純白。清白。尽白。

全てが白、否、一カ所だけ赤かった。

短く揺れる白髪、整った顔立ち、背中からは二対双翼。

それは、天使だった。

鉤爪のあるスラリとした手足を持っていようが、ギリシャの石像“勝利の女神”ニケーのようなケープを纏う天使は美しかった。唯一の汚点があるといえば、それは瞳。

全てが陶器のように滑らかな白の中、瞳だけは真っ赤だった

対して片方、こちらは対照的だった。

地に付きそうな程の黒い長髪を無造作に垂らし、燃え盛る牡牛の下半身、人間の上半体といった悪魔そのもの。悪質の随を極めていた。顔は人間の範疇に収まるものの、残虐と愉悦に満ち、猫背ゆえか、獵奇的にさえ見える。

まず天使が一礼する。

「私は紅世の徒“血の愛嘆”アプラス」

仕草の一つ一つが官能的で、身に纏う神秘性に心をかき乱されたが、カラドボルグからの存在の力が手の平に痛みを与え、シリウスは気を引き締める。

「オレ様ハ、紅世ノ王“火輪突蹄”ベリアル！」

下卑た笑いを浮かべながら、悪魔が名乗る。

シリウスはちらりとラフィールを見る。

（フレイムヘイズの称号は、私たちが付ける。あなたは、私が決めた名を名乗るだけでいい）

シリウスが頷くと、脳内にイメージが伝わる。

そうして、シリウスはフレイムヘイズとして、始めて名乗った。

「紅世の王“魂沌の枷”ラフィールのフレイムヘイズ“波慧の喰い手”シリウス・ベックマン」

シリウスは鋼の鞆―カラドボルゴから蒼晶剣―カラドボルグを抜くと正眼に構えた。

第九話【世界からの喪失】（後書き）

一応、シリウス、ラファイール以外は神話、伝説から名前が来てます（笑）
シリウスはエジプト語で聖なる炎、ガラジャは怪物、カラドはヨーロッパ神話の武器、などなど。暇があったら調べてみてください（笑）

第十話【修羅の巻】（前書き）

ようやく夏休み……よし、せめて四回は更新するぞ！

第十話【修羅の巷】

なぜ、紅世はこの世界に扉を開いたのか。なぜ、紅世の住人たちは、この世界を渴望するのか。

その起因はわからない、ただ：そうなるべくしてそうなったのだと。この世界から外れた修羅の巷に、あるべくして在る者。

それがフレイムヘイズ。

紅蓮のドームに包まれるのはアレクサンドリア病院。

比較的新しく、近代医療の一角を担う大病院だが、今は争いの決戦場でしかない。

封絶という名の自在法（存在の力を繰って起こす有り得ない魔法）、次元の狭間の中にその範囲内の全てを閉じ込め、切り離す不可視の力。

赤く染まる中庭には、紅世の魔物二体が来襲したさいに起きた暴風で、人や物が砕け、散らばっている。

直視をためらう程の惨劇の場で、シリアスは悩んでいた。

目の前には紅世の魔物が二体。しかも片方はラフィールと同格の王だという。

それをフレイムヘイズになりたての自分が倒せるか。

無論、勝てるとは思っていない。病院や人々を守りたいと思うが、自分にはそれだけの力がある訳でもない。

フレイムヘイズとはあくまでも、この世のねじれを正す者、ならばまずは生き残ることが第一である。

「波彗の喰い手」シリウス：イイ名前ダナ」

名はベリアル、真名は“火輪突蹄”。

燃え盛る雄牛の下半身に異様に長い黒髪を垂らす痩せこけた、骸のような男性の上半体。その偉業の存在が、蹄を石畳に乗せ、ひび割れを走らせる。それだけで、その物理的な威力と硬度が推し量れる。シリウスは警戒するように、半身の構えを取り、神器・蒼晶剣カラドボルグを左手に、鞘カラドボルグを右手に携えながら距離を取った。

その半人半牛の魔人は、口許に濁った微笑を浮かべながら中庭を歩く。

封絶という名の自在法に包まれた空間。因果孤立の、世界から切り離された場所を真っ直ぐ、シリウスへ歩み寄っていく。

「安心シナ。マズハ俺様カラ相手ヲ、シテヤル」

そう言って肩越しに陶器の天使“血の愛嘆”アプラススを振り返る。当の彼女は構わないとばかりに一步退き、観戦に徹する構えを見せた。

それを見て、良しとベリアルが頷いた。

「ヨシ、イクゼ」

ゴウ——ン——

ベリアルの脚にある火輪が更に燃え上がり、足下の全てを吹き飛ばす。

「気をつけて、あれは自在法。紅世の魔物が使う、存在の力を媒介にした異能の技。見掛けに騙されず、過信せず、見極めなさい」

カラドボルグからの警告と同時に、ベリアルが脚を踏み鳴らす。刹那、何もない空間から炎の槍が現れ、シリウスに逼る。

「なっ!？」

咄嗟にカラドボルグを横に振るい、炎の槍を薙ぎ払う。

槍が火の粉になって舞い散る。シリウスがベリアルの方へ向き直ったその瞬間、脇腹にとてつもなく重い衝撃と激痛が襲いかかった。

「がっ……!？」

虚を衝かれ、前のめりになるシリウス。

その頬をベリアルが隙ありと歓喜の声とともに拳で打ち抜く。

激音。

まともにくらったシリウスは回転しながら病院の壁に激突し、壁を粉碎し突抜ける。

無数の破片と砂埃が中庭に降り注ぐが、ベリアルは警戒のかけらもなく斜に構える。

「集中!! 自在法とは有り得ない不思議を起こす。見掛けに騙されず、見掛けの動作に気を配る!!」

「…っあ、はいっ」

ガラガラと瓦礫を掻き分け、穴から這い出るシリウスにラフィール

が檄を飛ばす。

自在法とは、存在の力を練り上げ、自在式と呼ばれる文字の羅列を組み合わせ、発動する。

ベリアルの場合は自在式を省略し、自在法そのものを一つの力として能力としているらしかった。

それにしてもと、シリウスは感嘆する。

コンクリートをぶち破っても軽い痛みだけで、それほど身体に異常はない。むしろ殴られた頬が一番痛くらいだ。

もしフレイムヘイズでなければ、今ごろは肉片になっていたかもしれない。

「油断しない！」

ラフィールの叱責にハツとすると、高笑いを上げるベリアルが炎の槍を脚から放つところだった。

前に転がるようにして、それを躲す。途端、背後で爆発が起こり転がる勢いと合わせて更に吹き飛ばされる。

槍が躲された直後に爆発したのだ。

「コンのおっ……!!」

シリウスは急いでカラドボルグを構えて、立上がり、目の前のベリアルを睨む。

「ヒヤハツ、弱イ弱イ」

ベリアルルの突進。シリウスは身構えるが……。

「挟撃!!」

ラフィールが叫ぶと背後から炎の槍がシリウスにぶつかり爆発。

咄嗟に鋼の鞘カラドボルゴで防ぐが、そのよろけた身体にベリアルが衝突し、呻く間もなく伸びた手の平がシリウスの頭を石畳に叩き付けた。

「がは……っ」

後頭部から地面にめり込んだシリウスの口から呻きと、血の代わりの橙の火の粉がパラパラと零れる、が。

零れた火の粉が赤や青に変化したと同時に、シリウスの奥、ラフィールの存在が震えた。

「でやあっ!」

シリウスが頭を掴むベリアルの手首を鞘で弾き、剣でを胸を一閃する。

不意を衝かれたベリアルルの胸元に真一文字の切り傷が走り、濁った赤い炎が噴き出した。

だが、シリウスの反撃は終わらず、力がなくなった手を振り払いその反動で立ち上がると、カラドボルグを片手に風車のように回転しながら移動攻撃をしかけていく。

まるで何をすればいいかわかっているように。

右足を軸にしたカラドボルグの回転。

蒼晶剣の連撃に対し、体勢を立て直したベリアルも反撃しようとするが、流れるような回転撃の手数に圧倒されて下がるしかなかった。

「考えるな！ 勢いに乗れ！」

ラフィールが叫べば、地を滑るように弾かれたベリアルに駆け、蒼晶剣を突き出す。

ベリアルがそれを受け止めようとする素振りを見せたが、転がる勢いで脚を掲げて、踵の炎輪を蹴り揚げる。

ガキンと火花と金属音が響くが、即座にシリウスは弾かれた体勢から半円を描いてベリアルの首を撥ねようと躍りかかる。

ベリアルはすかさず首を下げてやり過ごし、火輪から火槍を乱射する。

だが、爆発も穂先もシリウスに届く前に両断され、むしろ止まった分だけ危うさが増してしまった。

「図ニ乗ナアツ、コゾウ！」

ベリアルが吠えると、炎の槍が膨れ上がり、シリウスごとカラドボルグを弾く。

アプラスはそんな仲間の醜態に、僅かに眉を潜める。

当然、それに気が付いたベリアルは歯ぎしりをしながら、燃える飛礫をぶつけていった。

まさか、新米いやそれ以下の無知のフレイムヘイズに此所までしてやられるとは思わなかった。

目まぐるしく交錯する二人は、互いに小技をぶつけながら隙を伺う。が、場の流れはシリウスにあるといえた。

前半こそ危ぶまれたものの、元より死線を潜り抜けての契約を交わした身。未だに恐怖が麻痺していた。

それに加え、互角に戦っているベリアルは恥辱と侮辱の熱に苛まれ、

焦れて大技を放つ。が、ベリアル両手から放たれた巨大な火球をシリウスは右手に持っている鞘、カラボルゴを投げ付けた。

火球に鞘が飲み込まれたように見えたが、次の瞬間には火球が破裂し、突抜けた鞘にベリアルが後方に弾き飛ばされる。

そして、爆発に紛れ跳躍していたシリウスの刃が、先ほど切り付けた傷跡に垂直に重なり、魔物の胸が十字に引き裂かれる。

アプラススはベリアルが油断した訳ではないと、フレイムヘイズの戦いをみて悟る。

この力は紅世の王の助言だけではない、フレイムヘイズ自身も有り得ないが、相当に場慣れしている。でなければ、この現実の説明が付かない。

「クソガアアアア!!!!!!」

バン!!

ベリアルが切り裂かれた身体をもとめせずに、足下を爆発させた。地盤ごと、追撃を狙っていたシリウスが弾かれる。

「油断大敵、落ち着いて」

「はい」

そう言って王に返答しながら、フレイムヘイズは構え直した。

その様子に、逆撫でされたようにベリアルは口や傷口から火の粉を噴き出し、憤慨する。

自分を馬鹿にするクソフレイムヘイズ、ああ……面倒だ。

「オマエ……イイ。連レテカエル命令ハ破棄ダ！俺ノカヲ見ロ！」

「！」

尋常ではない力がベリアルに集まっていく。
危機感を感じたシリウスが鞘に剣を納れば、ベリアルが口を限界まで開く。

シリウスが鞘ごと剣を正眼に構えると、鞘に縁取られた獅子の顎が開き――

大きく開かれたベリアル口へと火輪が凄まじい勢いで獄炎が噴出され――

獅子とベリアル口からそれぞれ橙、濁赤の光が迸る。

そして

「フレスベルグ！」

「ゴモラ！」

双腔から、ほぼ同時に存在の力を練って作られた光条が放たれ、ぶつかる――

までの刹那の間、 天空より

虹 天 剣 | ……

第三の光条が降り注ぎ、シリウスとベリアルルを穿ち、そして…
…虹が爆発した、気がした。

シリウスは光の波にさらわれ、気を失っていった……。

第十話【修羅の巷】（後書き）

※設定は本作に乗っ取っています。有り得ない事には理由がありませんし、伏線も回収しますので+

第十一話【海原】（前書き）

そろそろ色々と伏線回収しないといけませんね…。

紅世、フレイムヘイズ、シリウスの三方向から物語を進めます。シリウスと戸惑い、フレイムヘイズのように任務を優先し、紅世の魔物の画策を見届けて下さい。

第十一話【海原】

アレクサンドリア病院襲撃二日前、大西洋。

“徒”、それは異世界・紅世からやってきた存在。

この世界、人の世界を喰らい、自らの糧として、“存在の力”を得て、世界を歪める存在。

「それが私…私たちにとっての紅世の徒の価値観よ」

大西洋のど真ん中、波尾を水面描き推進する大型客船の甲板で、手摺に身体を預ける女性がそうばやいた。

晴天に恵まれ、運良くとんとん拍子にこの船に乗ったはいいが、パツと見、アングロサクソン系の白人女性は誰にいうでもなく、ショート金髪とワンピースの裾を風になびかせて言葉を紡いでいく。日差しは南部大陸の眩さを水面に映し、進行方向はまるで光の巷だった。

「笑っちゃうくらい、幼稚な発想だけどね？」

「しかし、事実なんだ。仕方ないじゃないか。君もわかってる筈だよ？」

彼女の他に誰もいない甲板に、突如としてスマートな印象の男性の声が響く。

女性はあくまでも言葉の内容に不満気な顔をするだけで、その声に対しては別段、気にはしていなかった。

それもそのはず、フレイムヘイズである彼女には声の主も、居場所もわかつている。

女性は溜め息をつくとき左耳にかかっていた髪を掻きあげる。すると、隠されていた耳が姿を晒し、装着していた木彫りのイヤリングが露になり、そっと細い指先で撫でる。

「オーセー？ 私は、正論が大ッ嫌いな。知ってるでしょ？」

「もちろんさ、長い付き合いだからね。パティ」

パティ改めパティリシアはにつこりと微笑を浮かべると、すぐにまた鎮鬱な表情に戻る。

心には嬉しさと懸念が渦巻き、あまり喜ぶのをためらわしていた。

「わかる？ 紅世の徒は化け物だ：倒せ、よ。あなたも紅世の住人なの」

「仕方ないさ、それが戦略だよ。実際、士気をあげるなら敵を嫌いにさせればいい」

「ふーん、意外に淡泊ね：よつと」

手摺から軽く身体を離して慣れない甲板の上を歩いていく。

水耐性か、水分を吸収しにくい檣の木の床は、希望とは裏腹に軽快に足音を響かせる。もともとの観光船ミラレント号は軍事船だった。

経済成長の煽りを受けて、観光客が増えれば不沈を約束された船が

必要になってくる。

そこで比較的作りのよい軍から船を買い、それを使用していた。

時折、船体が揺れれば、足を縛れさせ、悲鳴を上げておかしそうに口許を緩ませる。

「んふ、船って楽しいわね。さって、オセ…改めて確認しましょう？」

「何をだい？」

「決まってるでしょ、私たち“四人”がアレクサンドリアにいく理由よ」

船内の中に入り、独り言を話すパティリシアに奇異の視線を向ける擦れ違う視線を気にすることもなく、まるで当たり前のように廊下を歩いていく。元々フレイムヘイズは存在を知られない為の存在だが、パティはあまり頓着しないようだ。

「詳しくはボクも知らないよ。クーベリック殿から直接聞いたのは“彼”だからね」

パティリシアはオセの返答にまた鬱の影を濃くした。

通路の明かりに煌めく金糸を、苛出しそうにガシガシかきむしる。そうして諦めたのか肩を落とすと覚悟を決めて、手を掲げた。

「もう、クーベリックさん…なんでパートナー付けるかな…」

「今回アレクサンドリアで起きたことは謎が多い、というよりは謎そのものだからね。不確定要素があるなら、内包する確率を高めれ

ばいい、つまりはそういうことさ」

要するに何があるからわからないから沢山でいけばいいとの理由なのだが、パティは

「正論は嫌いって言うてるでしょ！」

ツンと顔をあげれば耳飾りを指で弾く。その拗ねた子どものような仕草に

「やれやれ」

今度はオセが力無く溜め息を付く番だった。

二人がパートナーの部屋の前まで来ると深呼吸し、

（あの人、怖いし話合わないから…苦手なのになあ…）

おっかなびつくりの手付きで扉をノックした。

すると寸暇も無しに許可す声音が響き、パティリシアとオセは緊張した面持ちで、ドアを押し開いき、部屋へ入る。

客室は近代的な調度品に囲まれ、確かに見る者がみれば素晴らしく見えるのだろうとは思ったが、パティリシアにはいささか窮屈に感じた。

それはこの部屋の主も同じらしく、無造作に置かれた荷物や衣服が

部屋の雰囲気をぶち壊しており、パティリシアは少しだけ好感（オセは反感）を覚えた。

そして、その主はスーツ姿で丸枠の窓から覗く大海原を凝視し、パティリシアやオセに頓着する様子は微塵もない。

パティリシアが気まずそうに咳払いすると、肩まである黒髪を揺らして男が振り返る。

目に付くのは、初老にも関わらず端正な顔立ち、西洋人ばなれした肌の色。そして、左手に填められたサムライが付けると聞いた禍々しい漆黒の小手。

射抜く様な視線を受けて、パティリシアは多少怯みながらもなんとか笑みを浮かべてみせる。

「船旅楽しんでる？ カザノスケ、スサノオ」

やや微妙なイントネーションで名前を呼ぶも、自分でしっくりこないと思ったのかパティリシアは紅世の王オセを宿す神器“ブレロ”に何かを語りかけ、再び口を開いた。

「えーっと、楽しんでる？ 総之介、凄ノ皇」

総之介と呼ばれた男が半目を開き、漆黒の小手…神器“無頼”から凄ノ皇が存在の力の流れを読み取る。

「…自在法“達意の言”か」

「……………ふん」

自在法：それは存在の力を使い作った自在式により、不可思議な事象を引き起こす異能の力。

達意の言により、パティリシアは総之介と凄ノ皇との直接的な意思疎通を可能にしたのだ。

二人からの言葉に決まり悪そうにパティリシアが身動ぎしてしまうと、それを聞いた耳飾りのオセが代わりに口を開いて執り成す。

「お互いが話せるようになったところで：そろそろちゃんと自己紹介をしないかい？一応、ボクらは仲間だ」

「一理ある」

オセの言葉に凄ノ皇が小さく頷けば、総之介がようやく声を発した。

「僕は紅世の王“神威” 凄ノ皇のフレイムヘイズ“ 獄鎧の纏い手” 総之介じゃ。以後よしなに」

そう言いつつ目礼をされてしまうと、パティリシアも慌てて例に倣い、

「あ、私は紅世の王“ 欺瞞の盃” オセのフレイムヘイズ“ 覇軍の創り手” パティリシア・スナットです。こちらこそお願いね」

人好きのする笑みを浮かべて右手を差し出したが、総之介はそれを凝視し、無視するようにインテリアの椅子にドカッと腰を降ろす。ピクッとパティリシアの笑みが引きつったが感情を（かなり）抑えて、向かい合うように置かれた椅子にゆっくりと、腰を落ち着ける。

それを見届けた後、総之介が椅子に肘を立てて、老獪ながらも精力

的な顔をさらに難しくさせて、数度、小手を叩いた。

「もう良いぞ、あまり女子を苛めるものではないな」

そう言って、総之介はガハハと笑いをあげる。

「は？」

思わずキョトンとするパティリシアと絶句するオセを尻目に、小手、無頼の凄ノ皇も高々と笑った。

「戯言を！…言い出しっぺはお前だろう。俺アんなこと止めろと言ったはずだ」

「はぁ！？」

パティリシアがガタンと椅子を蹴って立上がり驚愕の表情を浮かべれば、総之介と凄ノ皇は更に腹を抱え、笑いの渦中へと流されていた……

「それで？ “私を気まづくさせてやっちゃえよ作戦”の結果には満足したのかしら？」

「ま、さすがに美的センスに欠けるよ」

ジト目、半目（恐らく）の両者からの声に総之介ははまだピクツと震える口角を気にしながら、景気良く頭を下げる。

「あい、すまんかった。僕は面白いと思ったんじゃが…」

そのまるで謝罪する気ゼロ、あまりにあんな態度（ちなみに今の総之介はソファ―に胡座している）にパティリシアは両手で髪をかきむしった。

「あ”ー！！！！！！ クーベリックさん…恨むわっ！！」

その魂からの叫びを違う意味で意に介した様子なく、凄ノ皇が話の流れを変えた。

「もう、いいだろう。それで何の用で来た？」

「ああ、それはね……」

これ以上相方が気品を失う事を危惧したオセが、総之介と凄ノ皇の二人にあらましを説明していった。

「ふむ、つまりはアレクサンドリアで何が起こってるかを知りたい

と？」

「端的に言えば、そうなっちゃうね」

口許に手を当て、考える仕草の総之介に、パティリシアは頷いてみせる。

「パティ。これから儂が言う話しはそれなりに大事な話じゃ」

「愛称で呼ばないでよ。うん、わかった」

「実はなパティ、クーベリックを始めとする何人かのフレイムヘイズが気付いたじゃが」

「うん、だから呼ばないで。ああ、それは少しだけ聞いたわ」

「パティ、心して聞くんじゃ。二日前、アレクサンドリアの近海で巨大な封絶、に近い空間が発生した。封絶と同じように因果孤立空間なんじやんが、それは閉じ込めるものではなく、締め出すものらしい」

「呼ぶなってんでしょ○○○（自己規制）！！！！ え？つまり中にいる奴は出れて、外にいる奴は入れないの？」

「ああ、パティ、そうなる。まあ、フレイムヘイズや徒はその限りではないが」

「好きに呼んでいいよ……、えーと、じゃあ？」

一悶着の後、凄ノ皇が後を引き継ぐ。

「封絶の特性を考えてみる」

「因果孤立、世界からの切り離しだね。でも、フレイムヘイズに中に入られては意味はないんだから……あっ!？」

合点が言ったのか叫ぶオセに総之介と凄ノ皇は肯定する。

「つまり、何があったかを隠蔽するための空間……よね？」

結論を出すパティリシアに総之介が静かに頷き、付け加える。

「他に何らかの機能を持っていると考えた方がいいだろうがな」

うん? 思案するように額に手を当てたパティリシアが考え込む。そして、

「じゃあ、なんでそれだけでフレイムヘイズが二人も行かなきゃならいの?？」

どんな策略があるにしろ、通常フレイムヘイズ（師弟は除く）は単独兵士、一人一人が一騎当千の力を持っている。それが二人、ただごとではない。問い掛ける総之介は、

「実は…何百分分もの徒の存在の力を宿した紅世の徒がその異端空間から出現した」

「本当!？」

「ああ、そして消えた」

「は?」

驚愕を困惑へと変えるパティリシア。

「その調査、これが結論じゃ。わかったかな？」

勝手にまとめる総之介。それに一応は頷くパティリシア。

その対応に満足したのか総之介は立上がると、足早に部屋を退室していつてしまった。

「何百分の徒……か」

「大変だね、パティ」

「うん」

部屋は、静寂に包まれた。

第十一話【海原】（後書き）

さて、新たなフレームヘイズの登場です。本作を読んでいない人にもわかるような説明や補足を付け加えますので、気長に♪

第十二話【慟哭】（前書き）

更新です。こうした方がいいなどの意見は随時歓迎です。

第十二話【慟哭】

およそ四〇〇年前。

アレクサンドリア湾岸部。

シゲル城塞。

真っ赤に燃える世界。

時折上がる同胞の断末魔の声、そしてその名残火。

火が走る壁、天井。

何もかもが…赤、朱、緋、紅。

そんな世界で、彼女は立ち尽くし、現実からの逃避を続けている。

ここはアレクサンドリア地方にある湾岸部の砦。

時のアレクサンドリア王プトレマイオス二世が、対外的拠点の一つとして築いたこの砦は、古代の国家の重鎮に等しい力を集めた強兵養兵所として使われていた。

エジプトとエーゲ海の文明の双方の煽りを受けた巨大な砦。

南は平野地帯用に高台、北は湾岸部に対し岸からの細い小道のみと二極戦に合わせて作られている。

石造りのシンプルな砦はそれゆえに強固且つ実践的であり、数世紀に渡りアレクサンドリアの大地を守る防人として、その地に存在していた。

そして、その砦が時の流れの中に忘れ去られた時、紅世の住人が住

み着く。

だが、皮肉にも千年を越えた戦いは砦が、始めて負ける戦いへとなる。

こんなのは、現実じゃないと思う。

女は静かに膝を床着き、自分達の桃源郷になるはずだった、燃え盛る城を眺める。

支柱が碎け、崩壊した広間は彼と集めた宝のしまい場所だった。燃え盛る庭園は、彼が愛した花を植え、毎年咲き乱れるジャズミンを愛でる場所だった。

そう、女は愛していた。

彼を。彼と共に過ごす為のこの場所を。

ずっとずっとずっと百年間、彼の言う、平和で、花が咲き乱れる世界を夢見ていた。

なのに……。

彼と永久に生きるべき地を失った今、生まれて始めて恐れた。彼の悲しみを、怒りを、絶望を……私は理解出来るから。

これが悲しみ、胸をかきむしり、可能ならば臓物や魂を引きずり出して直接心を抱き締めたくなるような…強い感情。喜び以外に知った、初めての感情。

それを感じる自分が、酷く恐ろしかった。

彼が悲しむ事を悲しむ私…。思わず、胸を抱いてしまう。

どうしようもない虚無の器、満たす物がない坩堝。

その闇は彼女を追い立てる。人外である彼女を、悲哀と怒号の巷へ。

彼に会いたい、彼に会って抱き締めて貰いたい。この震える身体を、その御身に包んで欲しい。

ゆっくりと立上がり、燃え上がる石造りの城を徘徊する。

同胞の姿が見えない…。負けたのか？憎きフレイムヘイズ共に…。

使えない！！本当な使えない！！

私と彼の居場所を守れずに討滅されるとは、無駄死に！！犬死に！！無価値な死！！

責任を添加する事でしか自分を保てなかった…。

だが、その怒りの熱もすぐに退く。

力なく腕を振るえば、横に落ちてきた瓦礫がはるか彼方へと転がっていく。

いや、どうでもいい……彼と育むべく世界は燃えている。

今更、フレイムヘイズを追い払った所で意味はない。

ひょっとしたら、彼も死んだのかもしれない。

そう思うと、先ほどよりも強い悲しみが喉を衝く、狂いたい……狂わせて……！

この忌々しい痛みを感じるならば心なんていらない！

燃え盛る天井を見上げ、祈るように叫ぶ。

「みんなみんな、凍ればいい……！」

彼の力強いまなざしが、彼の優しい声がもう聞けないと思うだけで、
気力がなくなる。自分を象る芯が揺らぎ、視界が歪む。

そうして、炎が走る床に膝を着く。

「うっ……うっ……」

誰も見ていない悲しみ、嗚咽に近い瞬きの声が喉の奥からせり上がる。

轟音と共に気配が近付いてくる。

やがては私も、フレイムヘイズに屠られるのだろうか。

なら、早く殺して欲しい……。

「ああ、まさかとは思いましたが、まだ居ましたか」

「ふむ、様子がおかしいの」

掛けられた声に、ふと顔を上げれば、年の頃十になるかどうかの少年が瓦礫を掻き分け、回廊から現われた。
燃え盛る足場を物ともせず、鋭い眼光を突き付ける。

身の丈以上の巨大な鉄棒を肩に乗せ、ボロ切れを纏った褐色の肌の少年。

無数の傷跡が刻まれた、無表情の中で、唇だけが動く。

「ああ、名乗っておきましようか。私は“儀装の駆り手”カムシン・ネブハーウ」

「儂は“不拔の尖嶺”ベヘモット」

見た目相応の若々しい声でなめるカムシン。その左手首に巻かれた紐型の飾りからは、枯れたようなしやがれ声のベヘモット。

名乗るなりカムシンは、肩にかけていた鉄棒を両手で掴み、その先を目の前の紅世の王に向ける。

だが、今まさに討滅されようと武器を向けられても、女性は一瞬に煤が付くのも構わずに、枝先が絡まって出来たような腕を裾から覗かせ、フードの影から囁く。

「……………好きにしなさい」

「ああ、一応名前を聞いておきたかったのですが、まあいいでしょう。では」

高く構えられたカムシンの神器。

その時、かすかに呼ばれたような気がした。

――！

違う、気のせいじゃない！！

これは――

「ガアアアアアアア！！」

轟く咆哮と共に、頭上で石畳が砕けた。

その残骸と風圧に、砂塵が舞い上がる。

数秒が経ち、砂埃が晴れる。思わず目を見張る。

双つの鷲の頭を持つ蛇竜がカムシンから守るように、巨大な翼を広げて威嚇のために嘴を打ち鳴らす姿があった。

「ああ、見つかってしまいましたか。“天帝” ニーズヘグ」

その言い草に、右のニーズヘグが唸り、左の鷲が口を開く。

「陽動と足止め…確かに翻弄された。だがしかし、たかだか数人ごときのフレイムヘイズにこの“天帝”の相手が務まるものか！！」

「ニーズヘグ様！！」

よかった！生きていた！

フードの裾をただしながら女が近寄ると、ニーズヘグは長い尾を身体に巻き付けて守る。

その様子を見てカムシンは少し思考を働かせる。

恐らくニーズヘグ。戦うのは無理だろう。すでにその力の大半は消耗しているようだ。なぜならばこの戦は、フレイムヘイズ軍とニーズヘグの徒党との戦争であり、千人単位での戦いが先ほどあったばかりだ。

多数のフレイムヘイズと徒が戦死したが、その渦中にいたニーズヘグに余力があるとは思えなかった。

当然、それを知られていると自覚しているニーズヘグも、彼女を緩く、確かに締め付ける。

そうして唐突に存在の力が凝縮された炎弾を、左右の口からカムシンへと放つ。

それを受けたカムシンは鉄棒を床に打ち込み、地盤を砕き下層へと落ちて躲す。

ふと見上げれば、ニーズヘグが女性を連れて、夜空へと飛んでいくのが見えた。

「ふむ、このままでは不味いかの」

「ああ、まだ間に合います。“儀装”の用意を」

「ニーズヘグ様……よかった」

「案ずるな、お前は守ると約束したからな」

その言葉に、女性は胸が熱くなるのを感じた。
嬉しくて、温かい気持ち。

また、感情。

女性は、そっと自分を守る身体に抱き付いた。

ニーズヘグの下では、戦の跡が生々しく残っている。

かなり大規模な戦いが行われたとはいえ、長い争いの巷の中にもこれ程の戦乱は数える程しかない

。生き残った同胞には逃げるよいに言っただけなのに心配はないが、フレイムヘイズたちもそれを追いにいったのか、姿が見えない。いずれにしても、細心の注意を払わねばまた戦闘が始まってしまうだろう。

そう思い、高度を上げようとした矢先、背後から爆音が響く。

「なっ!?!」

「あれは…!?!」

空中に停滞し、丘に建てられた古城を見れば、有り得ないことに古城が吹き飛び、その瓦礫で出来た巨人が立っていた。

その大きさはニーズヘグがただの蛇に見える程、頭部は天を衝くように聳えている。

「アレが噂に名高い儀装か……厄介だな」

「ニーズヘグ様……」

こうしている間にも巨人はドンドン肥大化し、やがて完成した。圧倒的な体積と質量を誇る、巨人。あちこちの繋ぎ目からはカムシンが操る証拠である、褐色の炎がチロチロと岩壁を這っている。その中心部では、カムシンが静かにニーズヘグを見据えて、

「ラーの礫」

と囁いた。

巨人が片手を振り上げるとその拳には先ほどの鉄棒が握られていた。カムシンが持てば巨大な鉄棒も、巨人からしてみれば木屑に等しく、どうにも頼りない。

だがしかし、それが振り下ろされた時には、巨大な瓦礫と練り混まれた存在の力の塊がニーズヘグの身体に衝突していた。

数百メートルにも及ぶ瓦礫と存在の炎が組み合わされた鞭。荒々しくも荘厳な鉄槌が古より生きる王を打ちのめす。

「ぐおおおおお!!??」

油断していた訳ではない、が。想像を超えた一撃が女性ごとニーズヘグを地表へと吹き飛ばす。

蛇竜は、紫の火の粉を軌跡の様に振りまきながら、アレクサンドリア内陸の森林地帯へと墜ちていった…。

「目が覚めたか……………」

彼女が目を覚ました時に、視界に飛び込んだのは、折れた木々、抉れた大地…そして、死にかけてたニーズヘグの姿。

翼や尾で抱き締め守ってくれていニーズヘグが自分と呼ぶ。

彼女は尾から這い出すと、おずおずとかたわらに膝をつく。

するとニーズヘグは迎え入れる様に自分を翼で強く抱き締め、温もりをくれた。

たったそれだけで、自分は満たされていく。

「口惜しい…実に口惜しい」

「ニーズヘグ様…」

ニーズヘグが彼女を抱き締めながら、呻いた。

百年間、自らの夢の為に、ここまで戦い続けてきたのだ。自分たちの未来のために。

「すまぬ、我は死ぬ」

あやすように囁きかけるニーズヘグの言葉に、彼女の顔が歪み、鳴咽が漏れた。

わかつていた。何百というフレイムヘイズと戦い、儀装の駆り手の一撃をくらった。

彼を構成する存在の力が、風前の燈火だとわかっていた。

その体に樹木の手を回し、すがりつくように女はニーズヘツに抱き付いた。

「…いやッ…いや、ですッ…ニーズヘグ様あ…ッ。私も一緒に！」

女は蛇竜の鱗に顔を押しつけ喚いて啼いた、そして自害を決意する強靱な視線を向けたが。

「言っただろう、お前だけは死なせぬと…我が死ぬ理由を奪わないでくれ」

それは百年前、二人が初めてこの絢爛な世界にやってきた時に、交わした約束だった。

「我は、愛する者を守り死んだ。それでいい…しかし、お前を残すことだけが…我の心残りだ」

「……ニーズ…ヘグ様」

女が囁けば、ニーズヘグは翼を二枚伸ばして彼女を引き寄せ、強く、強く抱き締めた。

同時に、ニーズヘグの身体から藍色の炎が噴き出す。

「我は長らく生きてきた…時の流れを忘れる程に」

ニーズヘグは命の炎が散り行きながらも、言葉を次げる。

「その我が…今初めて死が怖い。お前を残し死ぬことがとてつもなく恐ろしい。我は死にたくない、無様と罵られようが、我はもつとお前と共に在りたかった…：すまぬ」

炎に包まれながら、置き去りしてしまう最愛の者に詫びた。

女は、泣くという悲しみを流す機能が欲しいと思った。

だが、紅世の住人の自分にそんな力はない。

泣きたい…：泣いて悲しみを訴えたい。

「…：を…：…：し」

「うん？ もう音が…聞こえなくなりつつある…」

ニーズヘグが苦笑浮かべ、死を早めるとわかっていながらも、愛しいものの顔へ首を寄せる。

「名前を…呼んでくださいまし」

ニーズヘグは最後の力を振り絞り、口を開いた。

お前にとこしえの愛を誓おう

とこしえの愛を―

——我が安らぎ、アケル

最後の炎が、自分を包んだときも、ニーズヘグはその翼でしっかりとアケルの体を抱き締めていた。

そしてアケルの非力な腕の中で、ニーズヘグは薄紫の朝日と共に、空へと散った。

アケルの慟哭が、紫に染まる朝焼けを割いて響く。

第十二話【慟哭】（後書き）

予想外に長編になりそうです（苦笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8290c/>

～灼眼のシャナ～外伝<バベルの塔>

2010年10月8日21時36分発行